福 岡 市 博 多 区

駅東三丁目遺跡調査報告書

福岡市埋蔵文化財調査報告書第102集

1 9 8 4

福 岡 市 教 育 委 員 会

福 岡 市 博 多 区

駅東三丁目遺跡調査報告書

福岡市埋蔵文化財調査報告書第102集

1 9 8 4

福 岡 市 教 育 委 員 会

序　文

日本住宅公団（現在は住宅・都市整備公団）は，福岡市博多区駅東３丁目に市街化住宅の開発事業を計画し，福岡市教育委員会に予定地内の埋蔵文化財の調査を依頼する運びとなりました。

委託を受けた福岡市教育委員会では，昭和52年９月から建設予定地内の埋蔵文化財発掘調査を実施し、調査によって杭列遺構が検出されました。

本書が，埋蔵文化財への理解と認識を深める一助となるよう広く活用されることを願うとともに，発掘調査から資料整理にいたるまで，日本住宅公団（現在は住宅・都市整備公団）指導員の先生方をはじめ多くの関係者からいただいた助言・指導・御協力に対し，深甚の敬意を表するものであります。

昭和59年３月31日

福岡市教育委員会

教育長　西津　茂美

例　　言

1．本書は日本住宅公団（現在は住宅　都市整備公団と名称変更）が計画した博多駅東三丁目の市街地住宅建設事業に先行して埋蔵文化財の事前調査を日本住宅公団の受託を受けて昭和52年度に実施した発掘調査報告書である。

2．事業は福岡市教育委員会文化課が行なった。発掘調査は柳田純孝、二宮忠司が担当し、事務は国武勝利が担当した。調査補助員として渡辺和子が参加した。

3．本書の執筆は柳田と二宮で分担して行なった。

4．挿図は二宮、渡辺が行なった。

5．遺構・遺物の写真撮影は二宮が行なった。

6．挿図内のＮ方位は磁北を示す。

7．本書の編集は柳田、二宮が行なった。

8．本書に掲載した地図は建設省国土地理院の承認を得て、同発行の2.5万分の1地形図Ｎ１―52―10―11―１（福岡11号―１）と福岡南部Ｎ１―52―10―11―２（福岡11号―２）を複製したものである。

本 文 目 次

Ⅰ　はじめに……1
　1．発掘調査に至るまで……1
　2．発掘調査の組織と構成……1
　3．遺跡の立地と歴史的環境……2
Ⅱ　発掘調査の概要……4
Ⅲ　調査の記録……5
　第1地点……5
　1．土層……5
　2．遺構……13
　3．出土遺物……15
　a）土器……15
　b）石器……15
　c）杭……15
　4．小結……23
　第2地点……24
　1．土層……24
　2．遺構……28
　3．出土遺物……28
　a）土器・石器……28
　b）杭……28
　4．小結……28
Ⅳ　まとめ……29

挿図目次

Fig. 1 駅東三丁目周辺の遺跡分布図……（縮尺 1/25,000）……3
Fig. 2 第1地点土層図—1……（縮尺 1/60）……6
Fig. 3 第1地点土層図—2……（縮尺 1/60）……7
Fig. 4 第1地点土層図—3……（縮尺 1/60）……8
Fig. 5 第1・2地点遺構配置図……（縮尺 1/200）……折り込み
Fig. 6 杭列見透し図—1……（縮尺 1/40）……9
Fig. 7 杭列見透し図—2……（縮尺 1/40）……10
Fig. 8 杭列見透し図—3……（縮尺 1/40）……11
Fig. 9 杭列見透し図—4……（縮尺 1/40）……12
Fig. 10 遺物実測図……（縮尺 2/3）……16
Fig. 11 杭実測図—1……（縮尺 1/8）……17
Fig. 12 杭実測図—2……（縮尺 1/8）……18
Fig. 13 杭実測図—3……（縮尺 1/8）……19
Fig. 14 杭実測図—4……（縮尺 1/8）……20
Fig. 15 杭実測図—5……（縮尺 1/8）……21
Fig. 16 杭実測図—6……（縮尺 1/8）……22
Fig. 17 第2地点遺構配置図……（縮尺 1/100）……折り込み
Fig. 18 第2地点土層図・杭列見透し図……（縮尺 1/40）……25
Fig. 19 第2地点杭実測図—1……（縮尺 1/8）……26
Fig. 20 第2地点杭実測図—2……（縮尺 1/8）……27
Fig. 21 土層柱状図……32

図版目次

PL. 1　1）杭列全景（西から）　2）B列杭検出状態（南から）
PL. 2　1）西側全景（南から）　2）西側全景（南から）
PL. 3　1）杭B列とC列全景（南から）　2）B列全景（北西から）
PL. 4　1）杭・B列全景（北東から）　2）杭・B列全景（北西から）
PL. 5　1）張出し遺構検出状態　2）B列張出し部分検出状態
PL. 6　1）B列杭の張出し部分　2）B列杭検出状態と土層
PL. 7　1）杭列全景　2）杭列とシガラミ検出状態
PL. 8　1）杭列全景　2）杭列全景とシガラミ検出状態
PL. 9　1）杭とシガラミ検出状態　2）青磁出土状態
PL. 10　1）土層状態（北から）　2）土層近景
PL. 11　1）第2地点遠景（北から）　2）第2地点全景（東から）
PL. 12　1）第2地点近景　2）第2地点杭列出土状態
PL. 13　1）第2地点杭列の全景　2）第2地点杭列と出土状態
PL. 14　出土遺物、土器・石器
PL. 15　出土遺物、杭
PL. 16　出土遺物、杭
PL. 17　出土遺物、杭

表　目　次

頁

Tab.　1　福岡市低湿地調査一覧表……31
Tab.　2　第１地点杭一覧表―１……35
Tab.　3　第１地点杭一覧表―２……36
Tab.　4　第１地点杭一覧表―３……37
Tab.　5　第１地点杭一覧表―４……38
Tab.　6　第１地点杭一覧表―５……39
Tab.　7　第１地点杭一覧表―６……40
Tab.　8　第２地点杭一覧表―１……41
Tab.　9　第２地点杭一覧表―２……42

付図目次

付図―１　第１地点杭列平面図……（縮尺 1/100）
付図―２　第１地点杭列見透し図……（縮尺 1/40）
付図―３　駅東周辺の旧地形と遺跡分布図……（縮尺 1/10,000）

Ⅰ はじめに

1．発掘調査に至るまで

1976年、日本住宅公団（現住宅・都市整備公団）は福岡市博多区駅東３丁目に市街地住宅の建設を計画した。福岡市教育委員会文化課では埋蔵文化財の確認調査の依頼を受け、1976年３月１日事前審査担当の塩屋、力武が試掘調査を行い杭列の存在を確認した。それに基づき文化課と公団で調査時期について協議したが当時は西区（現早良区）四箇田団地の発掘調査を継続していた時期であり、四箇田団地内の発掘調査が終了次第本調査に着手することとなった。

本調査は1977年９月から11月までの３ヶ月間にわたって実施した。その後、各種の発掘調査に追われ、資料整理できないまま今日に至っていたが漸くここに報告書の刊行までこぎつけることができた。調査の開始以来公団関係者をはじめ多くの人々の協力を得たことを記して感謝の意を表します。

開発申請地　福岡市博多区博多駅東３丁目47―１他（現博多区博多駅東３丁目４―10）
開発面積　　2,196㎡（市街地住宅建設）

2．発掘調査の組織と構成

調査委託者　日本住宅公団（現住宅・都市整備公団）九州支社
調査主体　福岡市教育委員会文化課埋蔵文化財係
教育長　戸田成一(前)・西津茂美(現)
文化部長　志鶴幸弘(前)・中田　宏(現)
文化課長　清水義彦(前)・生田征生(現)
事務担当　埋蔵文化財係長　三宅安吉(前)・埋蔵文化財第１係長　柳田純孝(現)
国武勝利(前)・岡島洋一(現)
調査担当　塩屋勝利・力武卓治(試掘調査)・柳田純孝・二宮忠司(本調査)
調査補助員　渡辺和子（現福岡県筑紫野市嘱託）
調査・整備作業員　牛尾準一、　大部茂久、　尾崎達也、　川畑淳二、　菰田重美
榊　光雄、　屋山利久
池　ヤエ、　尾崎八重、　菊地栄子、　菊地キミ、　菰田オリエ
菰田洋子、　榊　ツイ、　谷ヒサヨ、　谷フミエ、　又野栄子

松隈ユキノ、　土生裕子、　山田雪代、　尾崎京子、　真名子順子
斉藤美紀枝、　末安カズ子、　若狭睦代、　藤内光子

3．遺跡の立地と歴史的環境

博多湾に向かって開けた福岡平野には那珂川、御笠川の二大河川が南から北流し、博多湾に注いでいる。調査地点は、那珂川と御笠川(石堂川)にはさまれた那珂丘陵の北端から北へ0.5kmの沖積地で『福岡市文化財地図』(中部・南部・4千分の1)ではNo.36博多駅の北東隅から西へ23cm、南へ26cmの交点(C－1　駅東生産遺跡)に位置する。

現在の地番は福岡市博多区博多駅東3丁目4番10号にあたるが、福岡市に合併する以前は那珂郡比恵村に所属している。現在の付近の道路面の標高は4mで、昭和初期の現況図では3.7～3.8mの地点にあたるから、現地表高はあまり変化していない。今回の調査地点は丘陵端部と古砂丘の間の沖積低地にあたるが、調査地点の南には、福岡平野の中央部を南から北へのびる那珂丘陵があり、丘陵上や丘陵端部には弥生～古墳時代以降の遺跡が濃密に分布している(比恵遺跡群)。[注①]比恵遺跡群内では第1次～第8次調査により集落や墓地のほか、弥生前期の水田稲作に伴なう遺構・遺物が検出されている。

御笠川石岸の古砂丘上に立地する吉塚遺跡群内の東光院からは弥生時代中期の甕棺墓が確認され、那珂川石岸の住吉神社付近からは銅矛5口・銅戈6口が発見されている。一方、旧比恵川の北側の古砂丘に立地する博多遺跡群内では1976年の地下鉄工事に伴なう発掘調査以来、20数次の調査が行われ弥生時代の墓地、古墳時代の集落・墓地などが検出されている。

この一帯の歴史的環境についてはこれまでいくつかの説明があるので、ここではあえてくり返さず既知の遺跡の中で弥生時代の遺跡をあげると次のようになる[注②](1984年2月現在・遺跡の位置は別図1参照)。

①比恵遺跡群内第1次調査(1938～39　環溝住居址4、甕棺12)　比恵環溝住居址 注③
②　同上　第2次調査(1952　環溝1、土坑3、甕棺18以上、小竪穴)　注④
③　同上　第3次調査(1966　溝、甕棺2、貯蔵穴8)　春住遺跡　注⑤
④　同上　第4次調査(1979　甕棺12、貯蔵穴6、杭列木器)　端穂遺跡　注⑥
⑤　同上　第5次調査(1981　竪穴住居址42、掘立柱建物12、井戸3)
⑥　同上　第6次調査(1982　竪穴住居址9、甕棺44、土拡3など)　注⑦
⑦　同上　第7次調査(1983　竪穴住居址3、掘立柱建物20、井戸19など)
⑧　同上　第8次調査(1984　竪穴住居址他)　春住遺跡隣接地　現在調査中
⑨博多遺跡群内地下鉄関係A・B区(1977～78　東長寺前　弥生中期前半 甕棺16基)　注⑧
⑩　同　上　I区　(1979　弥生終末期　甕棺2基)

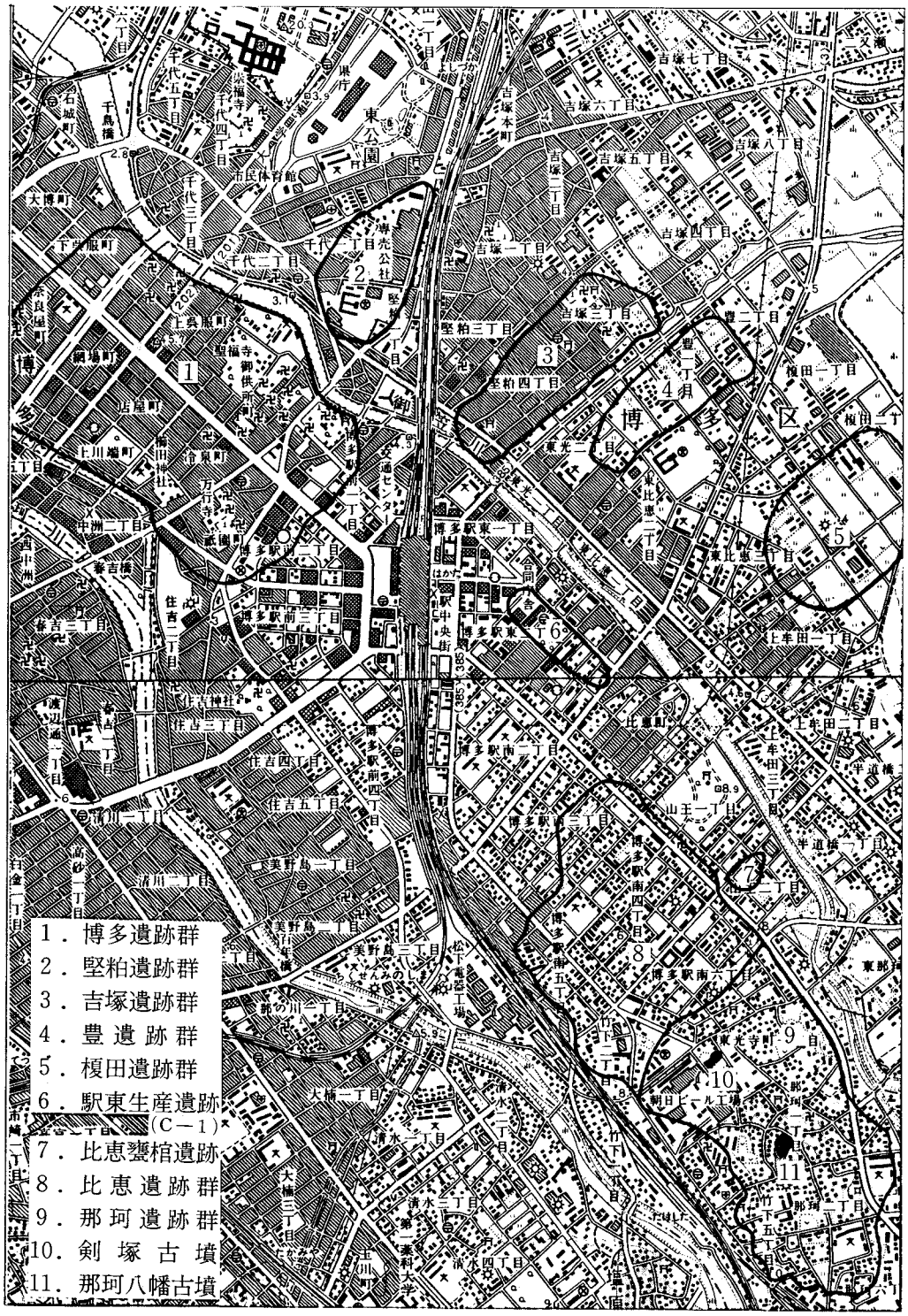


Fig. 1　駅東三丁目周辺の遺跡分布図（縮尺 1/25,000）

⑪博多遺跡群内第１次・第８次調査（1978・1980　東長寺内　甕棺７基）
⑫　　同上　　第４次調査　　（1979～80　　甕棺の破片）
⑬　　同上　　第12次調査　　（1981　　終末期甕棺の破片）
⑭　　同上　　第22次調査　　（1983～84　　天福寺内　中期甕棺）
⑮吉塚遺跡群内東光寺遺跡（弥生中期の甕棺）　注⑨
⑯住吉神社遺跡　（銅矛５口、銅戈６口一括出土、伝世品）　注⑩

Ⅱ　発掘調査の概要

試掘調査は1976年３月１日塩屋・力武が行なった。開発申請地の現状は水田であったため、畔に平行して東西方向に３ヵ所、畔と直交する南北方向のトレンチを４ヵ所設定して土層断面の観察と埋蔵文化財有無の調査にあたっている。基本層序は耕作土下に30～40cmの褐色粘質土1.0～1.5m の砂と粘質砂の互層、更に砂層とつづく。申請地の北東寄りに設定したトレンチで南東から北西方向へ連続する杭列を検出した。砂層には古墳時代の土器が認められたので、杭列の性格や構築時期を明らかにするため本調査が必要とされた。

本調査は1977年９月12日着手した。本調査は申請地の北東側で検出された杭列の広がりを追う形で進めていった。（調査日誌により経過を説明する。）

９月27日　杭列の上端は耕作土下の浅い部分にある。出土遺物は糸切りの土師器皿・弥生の壺・器台の小片が砂層に混在している程度で、杭列の時期を決定しがたい。

９月29日　雨。地質業調査協会の福岡平野地盤図作成の例会に出席し、駅東３丁目周辺11ヵ所の土質柱状図をトレース。注⑪

10月13日　杭列の写真撮影。（北東から南西方向へ約50m以上連続している。）

10月14日　今日から縦横断の実測開始。杭列は直線状にのびるのでなく、２～３ヵ所で屈曲している。杭上端の高さが異なるものがあり、時期差を示すと思われる。

10月17日　Ａ列東側の上部には竹や小枝・ワラ等を交互に組合せた柵が残っているため、杭連結の形状がわかる(19～21の杭の間)。

10月18日　杭の取上げ開始

10月27日　現場作業終了。

なお、申請の南西側に入れたトレンチでも別の杭列を検出したが、試掘調査から本調査に至る間に基礎の杭打ち作業、北西側の一部では本体の鉄骨組立て工事まで進行した段階で中断するという協議の不手際があったため、北東側以西については不明。

Ⅲ　調査の記録

第1地点

公団の調査地点を第1地点とし、北西部で緊急調査を行なった神山ビルを第2地点とした。第1地点からつづく杭列が道路をはさんで第2地点まで続いており、これは同一遺跡としてとらえる必要性がある。このことから緊急調査した第2地点の報告も今回の附編として報告する。

第1地点は南東から北西にかけての杭列と南に12mはなれ平行に走る杭列を検出した。発掘調査面積は2,196㎡でその主体となる遺構は杭列のみであった。

1．土　　層

Ⅰ　層　客土
Ⅱ　層　耕作土
Ⅲ　層　水田耕作床土（明褐色土）
Ⅳ　層　褐色砂質土
Ⅴ　層　茶褐色粘質土
Ⅵ　層　褐色粘質土
Ⅶ　層　茶褐色砂質土
Ⅷ　層　黄褐色砂質土
Ⅸ　層　泥炭質の黒褐色土
Ⅹ　層　黒褐色砂質土
Ⅺ　層　泥炭質の黒褐色砂質土
Ⅻ　層　砂層
XⅢ　層　泥炭層
XⅣ　層　泥炭層と砂との混合層
XⅤ　層　青灰色シルト層
XⅥ　層　砂層

以上が第1地点の基準層序である。土層の堆積状況をみると南東部では砂、粘質土、砂質土、泥炭質の土層が細かく堆積しているのに対して北西部では上部の砂層（Ⅹ層の砂質土を示す）がかなり厚く堆積している。また中央部ではよどみの現象にみられる泥炭層がある。これらのことから一時期は流れが急で、一時期はよどむ様な状態があったと考えられる。北西部では泥炭層をとりのぞくほどの水の流れの速さによって砂が運ばれてきた状態もみられる。

ボーリング資料や地質学の資料によると第1地点に地表下－3.9m～－5.75m、第2地点では、－4.60m～－5.50mに火山灰があり、これをはさんで上下とも砂層となっている。－8m前後では第三紀層がある。これらのことから第1・2地点とも凹地で水が流れている状態であったことを物語っている。

杭列は第Ⅲ層に杭の上端が認められ、恐らくこの部分から打込まれたと思われるがシガラミ等から考えるとⅤ層から上端部は地上に出ていたものと考えられる。

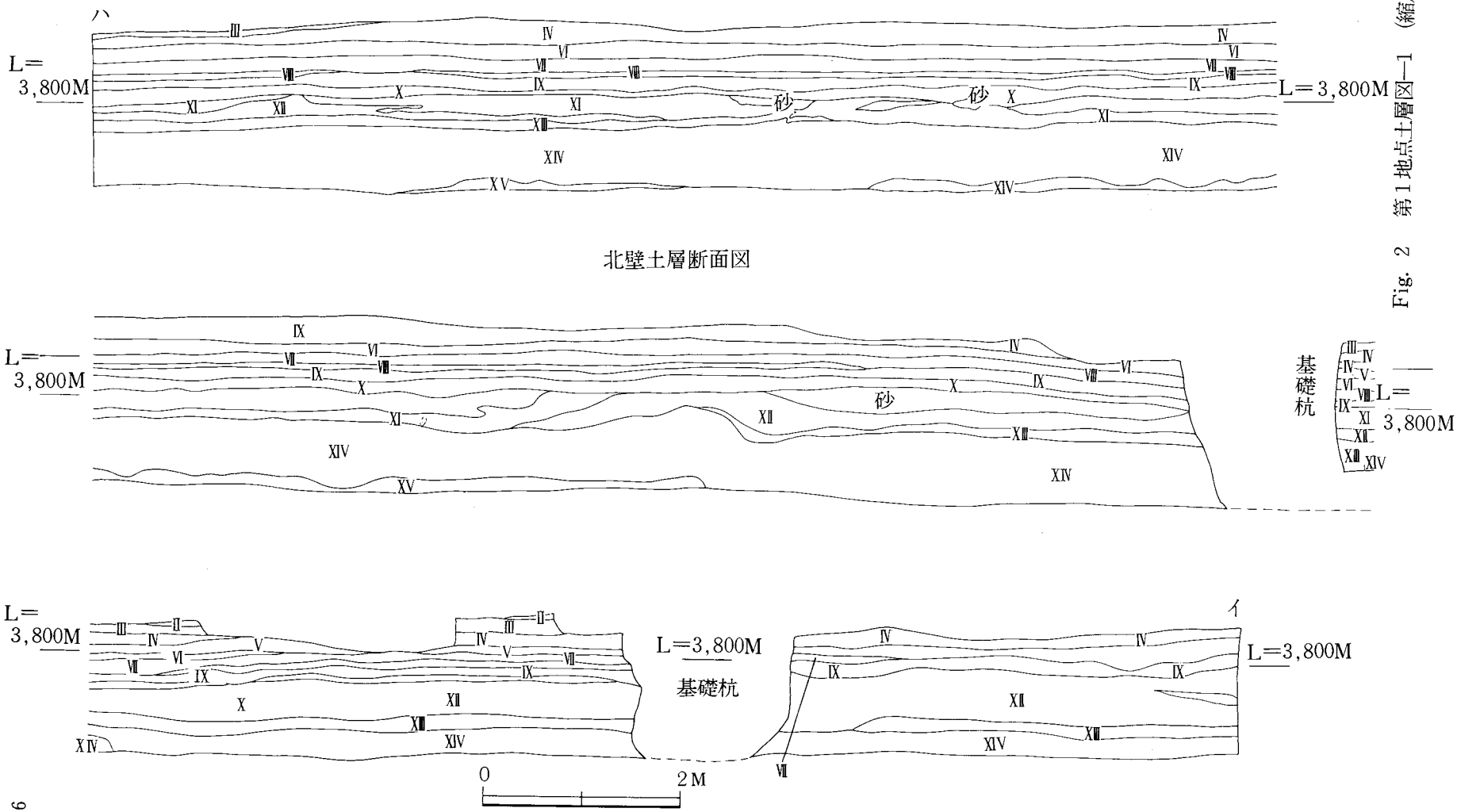


Fig. 2　第1地点土層図—1　(縮尺 1/60)

南壁土層断面図

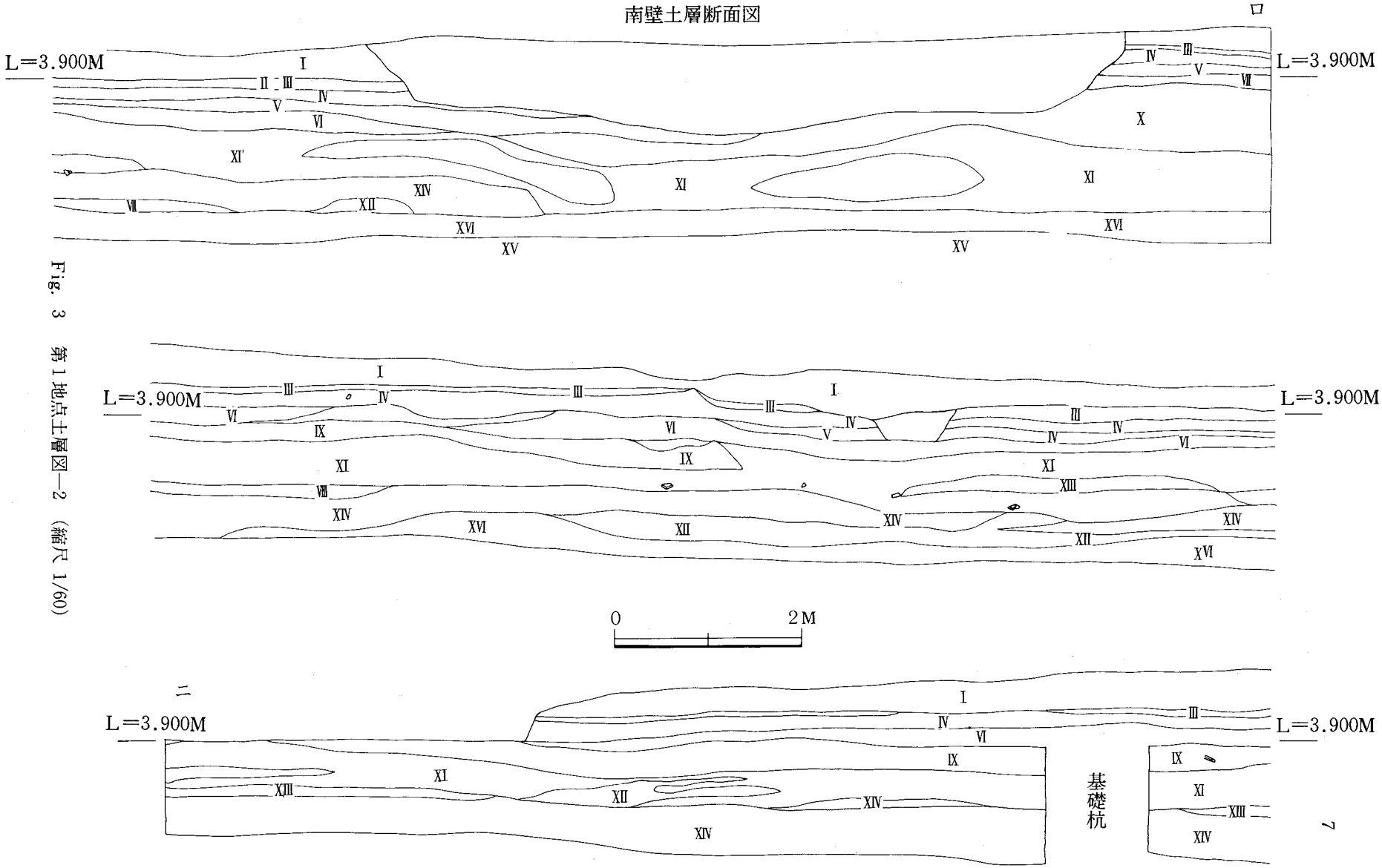


Fig. 3 第1地点土層図—2 (縮尺 1/60)

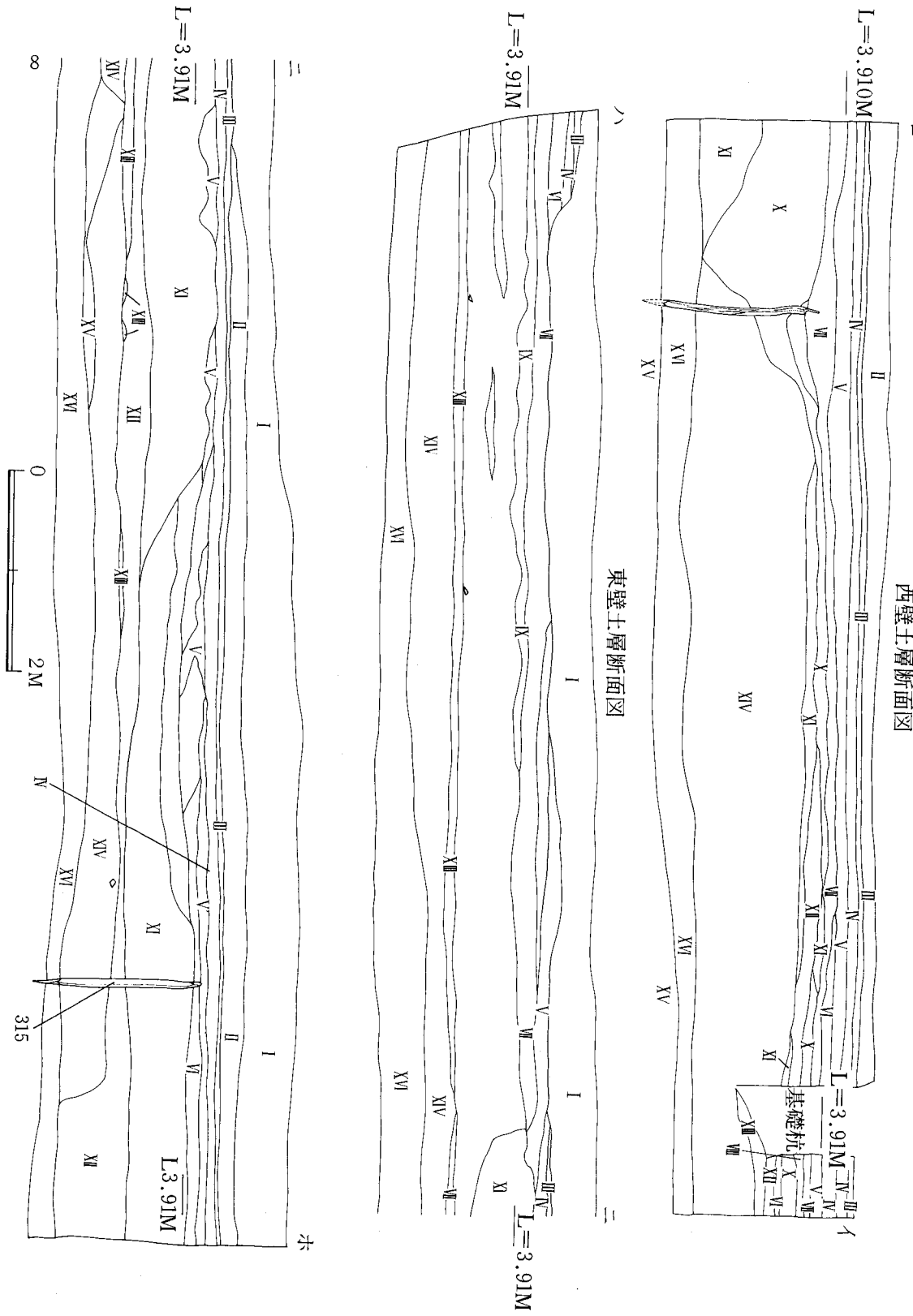


Fig. 4　第1地点土層図—3　(縮尺 1/60)

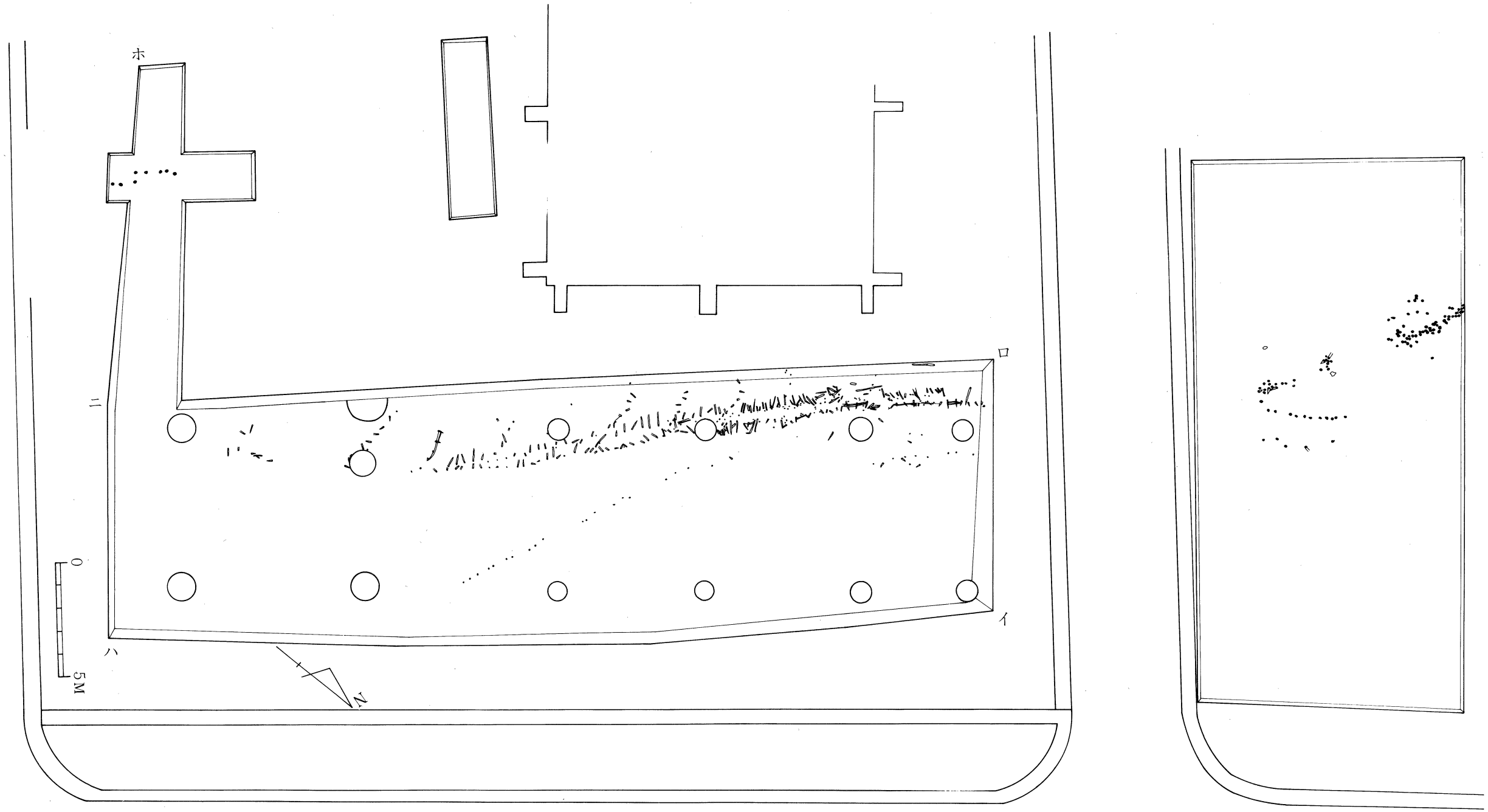


Fig. 5　第１・２地点遺構配置図（縮尺 1/200）

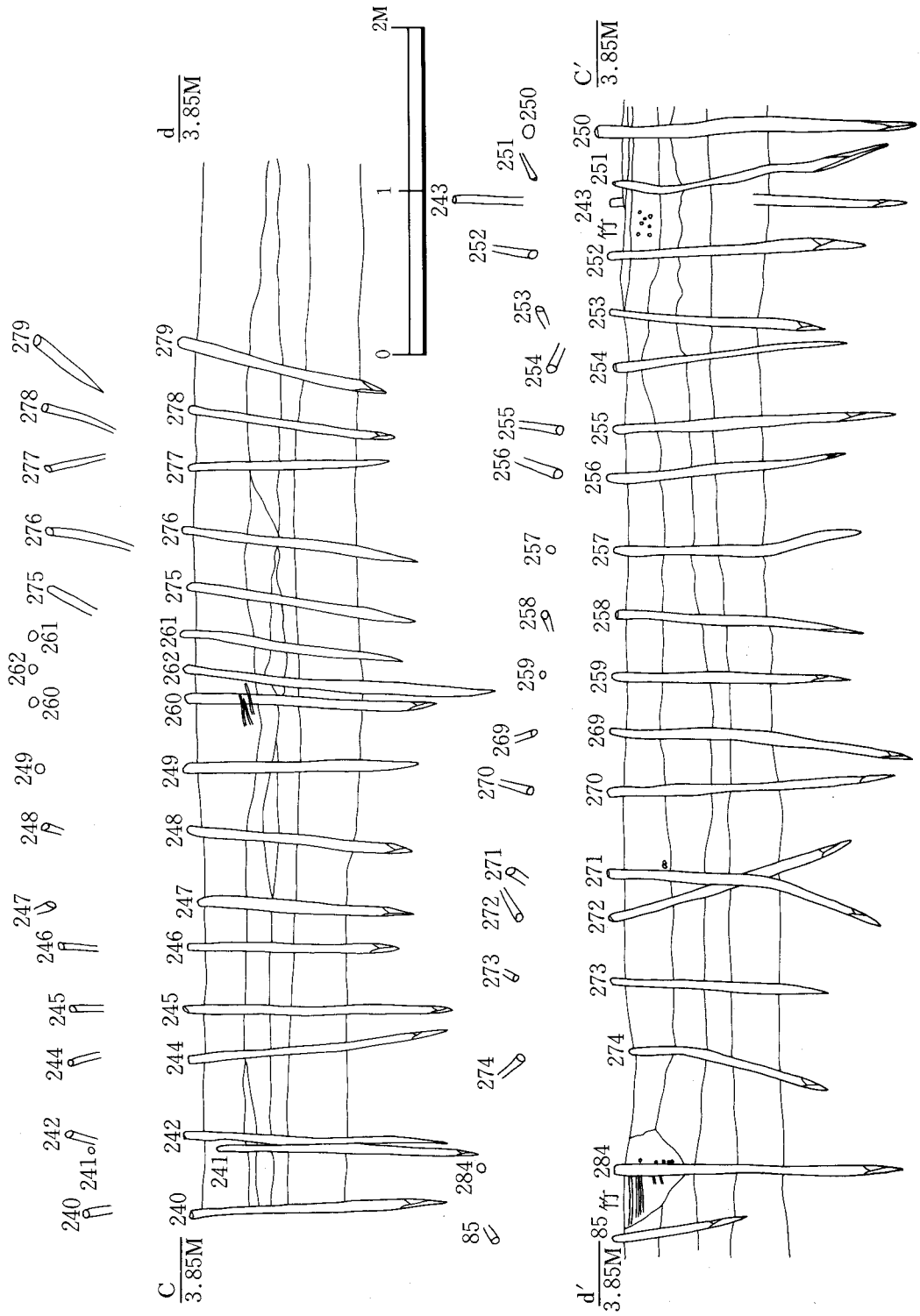


Fig. 6 杭列見透し図—1 (縮尺1/40)

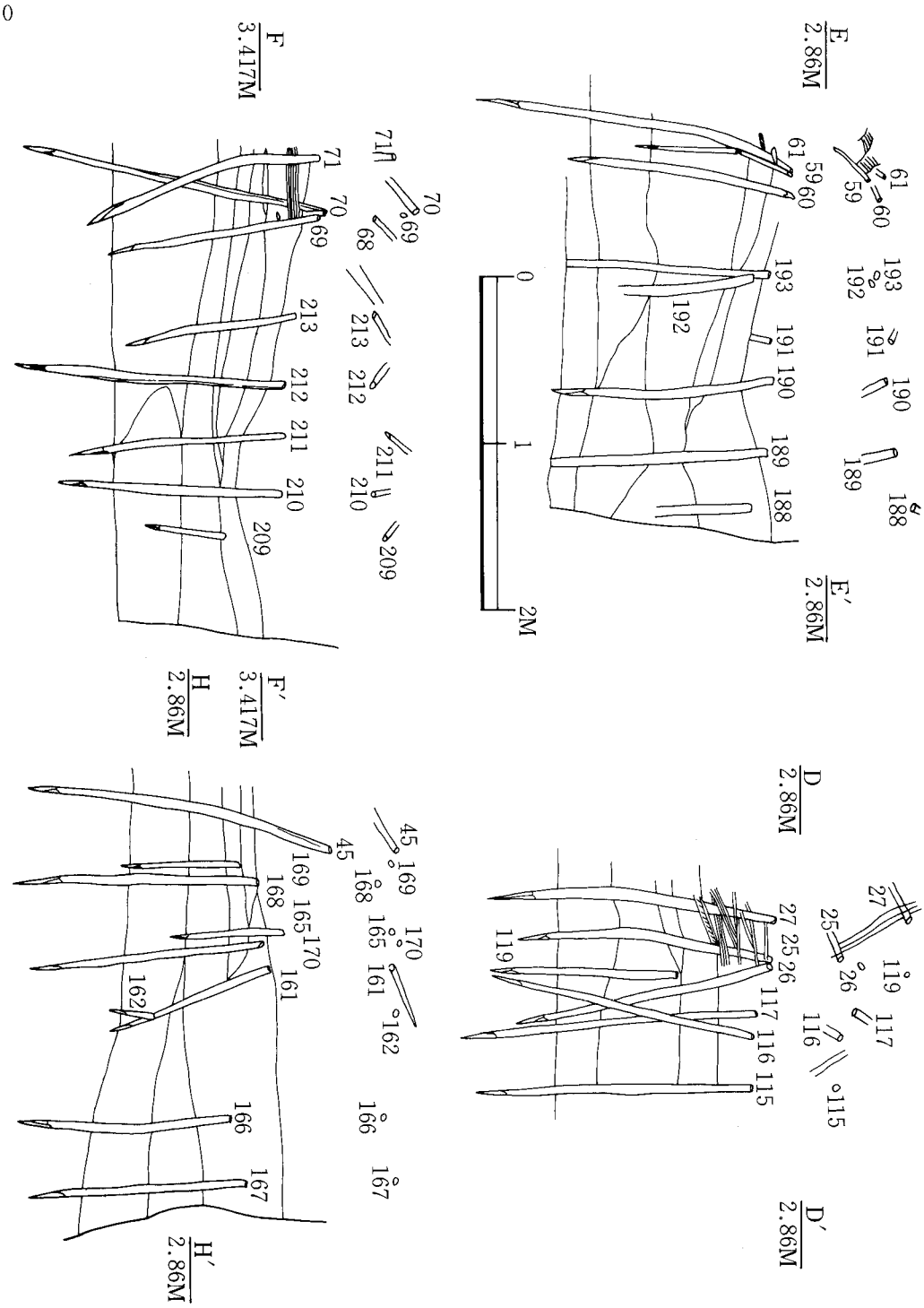


Fig. 7 杭列見透し図—2 （縮尺 1/40）

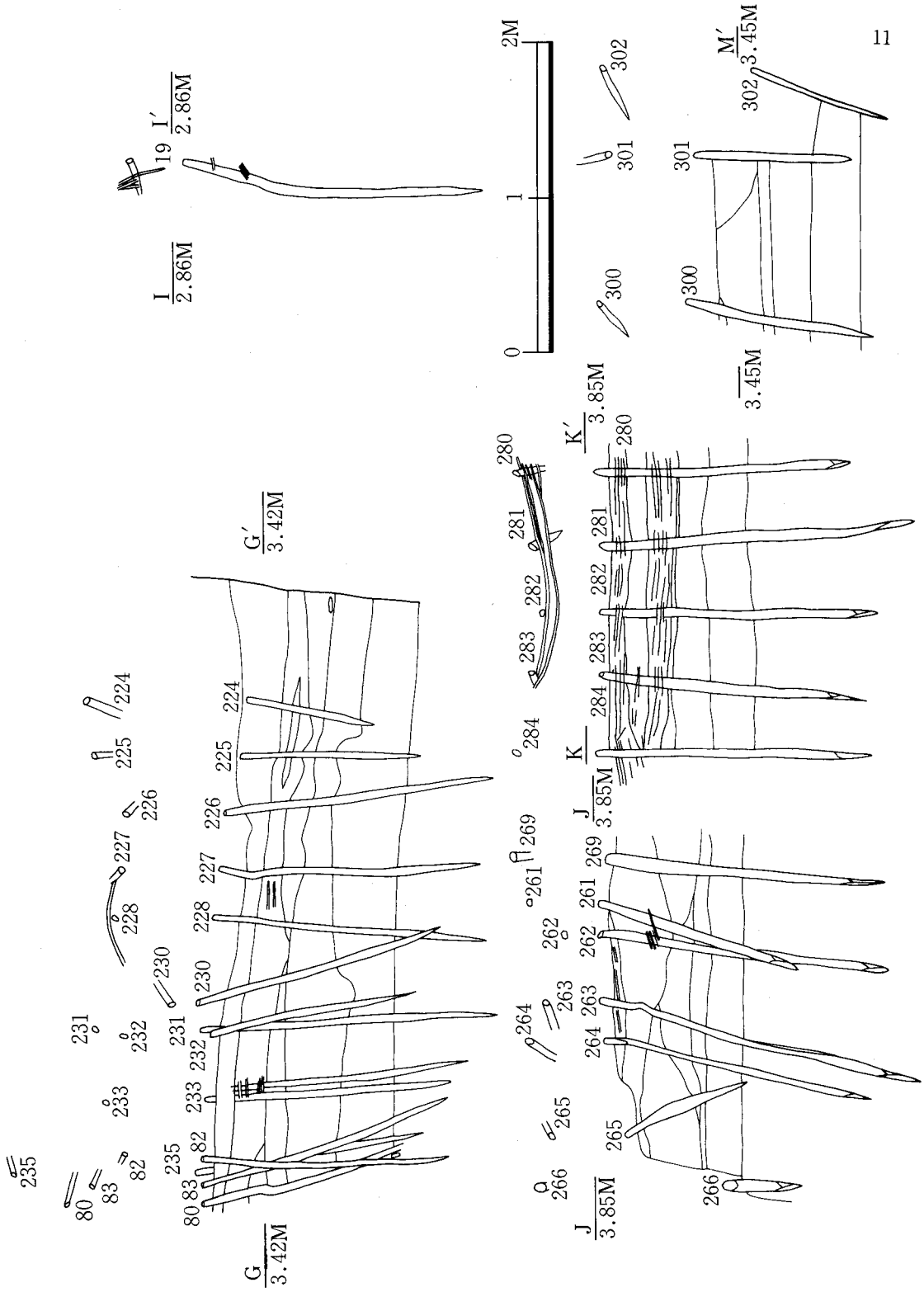


Fig. 8　杭列見透し図—3　(縮尺1/40)

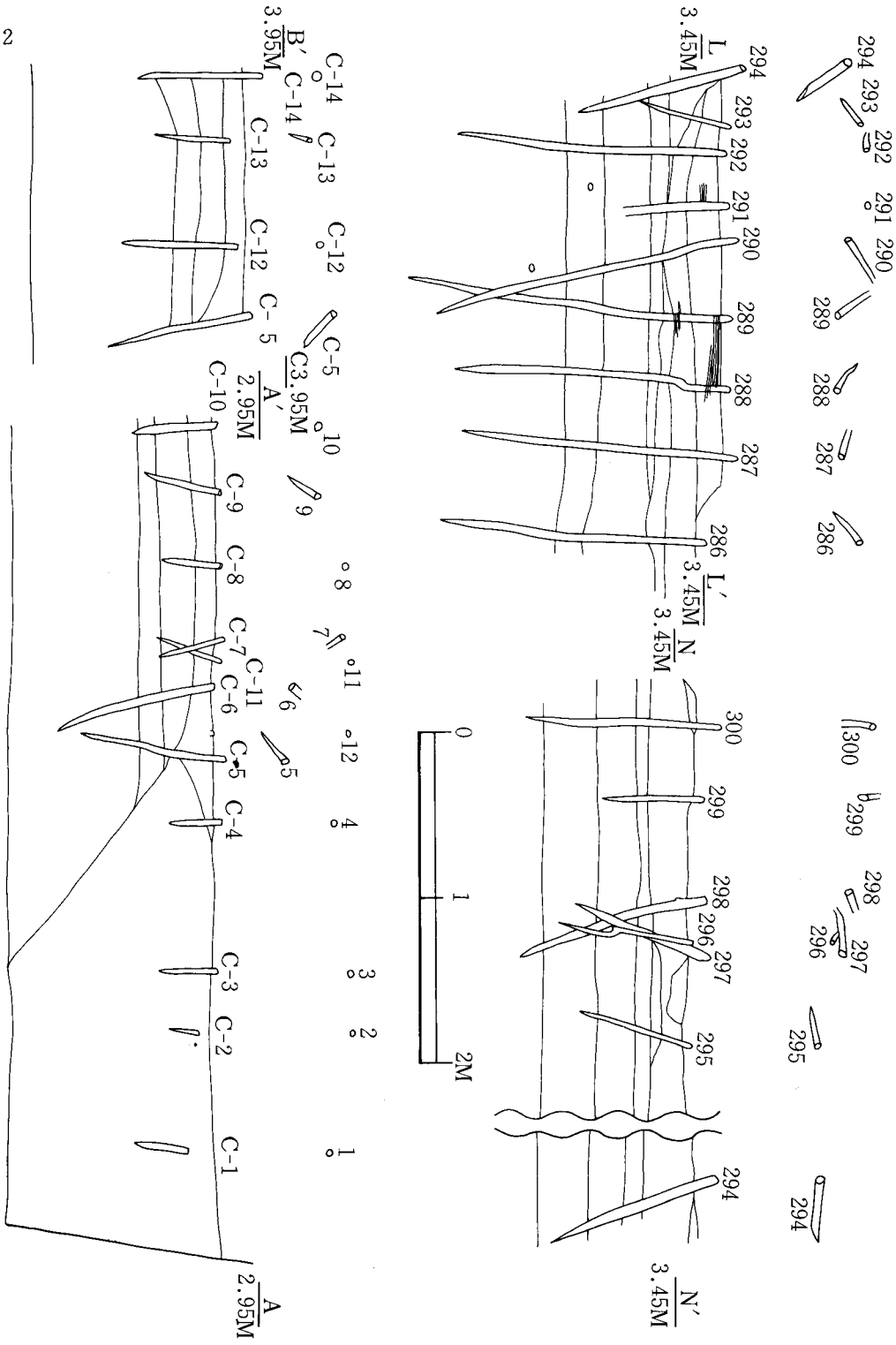


Fig. 9 杭列見透し図—4 （縮尺 1/40）

2．遺　構

第１地点の遺構は、堤防状遺構が検出された。３ヵ所に同一方向に並ぶ杭列があり、これらの杭列を便宜上南からＡ列、Ｂ列、Ｃ列として呼ぶことにした。この３つの杭列の中で堤防状の護岸杭として認められるものは、Ａ列とＢ列で、Ｃ列は補強用および水路の杭列と考えた。

Ａ列

Ａ列は調査範囲が限られたこともあったが、延長５ｍの間に８本の杭が打込まれている。北西部にはつづかず南東部につづく杭列と思われる。方向的にはＢ列とほぼ平行に並ぶものでＢ列との距離は約20ｍの間隔がある。杭は、ほとんど１ｍを越すもので径も５cm程度である。これはＢ列の主体をなす杭でも同様のことが上げられ、一応堤防状遺構の杭列と考えられるものを平均値を出してみると長さが160cm、径が5.5cmであるのに対し、補助杭と考えられる杭の平均値は、長さが31cm、径が2.7cm程度であることから、この差の根源を考えた時に長さの長い方を主要な杭、短い方を補助杭として考えた。

Ｃ列

Ｂ列の前にＣ列の杭をみると、Ｃ列はＢ列の北側に位置し、方向的には東南東から西北西に杭一条が並びＢ列に接する手前で南東から北西の方向に折れまがりＢ列と平行につづく。延長24ｍの間に37本の杭が打込まれている。Ｃ列の杭は短いのがほとんどで平均値を出してみると長さが31cm、径が2.7cmである。このことはＡ列、Ｂ列の主要杭の平均値、長さが160 cm、径5.5cm以上に比べても明らかに意味を持つもので、主要な護岸用杭とはならず、Ａ・Ｂ列と同時期と考えた場合に補助杭か、小さな溝の杭列としか考えられないものである。またＢ列の中にもＣ列の杭と同様の長さ径を持つ杭が認められる。これも補助的なものか、もしくはＣ列に対岸する杭とも考えられる。後者をとれば堤防状遺構のＡ・Ｂ列とは時期を異にする水路とも考えられる。

Ｂ列

Ｂ列は延長33ｍの間に221本の杭を幅1ｍの間隔で２列に配し、南側に張出し部分９ヵ所を配している。この221本の杭は、主要な杭（堤防状遺構に伴う杭と補助杭の2種類に区別した場合主要な杭とは、堤防状遺構に使用されたと思われる杭を示す）の大部分が長さ1.8ｍ以上、径5.5cm以上の丸木杭であるため他の補助的な杭との区別は容易である。

杭を打込んだ状態を見ると（Fig．７～９）ほぼ４つに区別することができる。

①　２本を１組としている。Fig．６、Fig．８Ｇ－Ｇ′、Ｊ－Ｊ′

②　１本ではあるがシガラミによって結びつけているもの。Fig．８Ｋ－Ｋ′

③　杭を交差させ杭自体で強化をはかっているもの。Fig．７Ｆ－Ｆ′、Fig．９Ｌ－Ｌ′

④　3～5本を集中的に打込んで強化しているもの。Fig. 7D－D′、Fig. 8G－G′

このように杭自体にそれぞれ工夫させているが特に①、②にはかならずと言って良いほどシガラミが検出でき③、④でも部分的にシガラミと組合せているものもある。このような方法で杭列は形成されているが、この状態は中央部から北西部にかけての杭列と張出し部分の杭列に認められる。次に張出し部分を見ると、B列の杭列に対して約45度の角度を持って作り出されている。この目的を考えてみると、水の流れがC列側にあった場合には、この張出し部分の役割は、B列をささえる役目と考えられ、また水の流れがA・B列間にあった場合の役割は、急激な水の流れを柔らげB列を保護する役目をもった施設と考えられるが、この2つの考えの内C列が同時期としてとらえた場合は後者、新しい時期の杭列と考えた場合は前者となるが、前者の場合にA列をどのように捕えればよいかが問題となる。ここでは一応、A・B列間に水路があり、B列を保護する役目を持った施設として張出し部分を考えておきたい。

B列における遺構上端面を考えてみると、その時代の地表面を考察することで解答が得られるものと思われる。この問題に直接的に関与してくるのがシガラミである。シガラミは杭の上端から30～40cm下にある。土層ではⅤ層茶褐色粘質土からⅥ層の褐色粘質土である。シガラミは竹、木（小枝2cm～2.5cmのもの)、ワラで構成されているが大別すると北半分は竹が主体で南半分が小枝、ワラである。Fig.8の杭280～284の間を例にとると上に横の竹を2本（径1.5cm～2.5cm)、中央部は4本、下に2本となる。2～5本を一束として交互に組合せている。また竹の場合、横の杭列をつなぐ役目のほかに縦の杭間にも認められ、縦横の杭をしっかりと結びつける役割をしている。このシガラミが認められる土層は、下層の砂と泥炭層の互層とは異り粘土であることは注目せねばならない。つまりシガラミの上端部を上限として杭の上端部は地表に露出していたと思われる。また杭には打撃痕を残す完形（138、202、215、212～223他）があり、その標高は3.86m、シガラミの上端は3.50mである。これらのことから堤防状遺構の上端はシガラミの上端と考察できる。この考えからシガラミを形成した時期が問題になるが、シガラミの土層中より弥生式土器、古式土師器、須恵器、石鍋、土師器皿（糸切り）等（Fig. 10PL. 14）が混入していた。これらが構築時によるものだとすれば、石鍋、土師器皿（糸切り）が一番新しいものであり、これ以降の遺構と考えられる。

以上のことからA・B列の間、20cmが河川（溝）と考えられ、B列の張出し部分は水流を弱めると共にB列の堤防状遺構を守る目的で作られたもので、現在は御笠川（石堂川）の左岸に遺跡は位置しているが付図―3をみると南側に条里がみだれている場所が認められる。これは御笠川がかなり蛇行していたことを物語っている。これは当遺跡の周辺部でも同様でたびたび河川の氾濫により被害を受けていた様相が土層上でも明らかである。

3．出土遺物（Fig. 10. PL. 14～16）

出土した遺物は、土器・石器・青磁等があるが、遺構の性格上遺物の量も少なく、二次堆積によるものがほとんどである。杭を打込み堤防状遺構を築造する時点でシガラミを編んで杭列を固定している層の中から出土した土器がこの堤防状遺構の時期を決定すると思われたが、弥生式土器から土師器皿（糸切り）まであり、その時期を決定するにいたらなかった。出土した遺物のほとんどが磨滅を受けており、量的にも砂層から出土したものが多いが、図示できるものはほとんど無の状態である。シガラミの中からも少量の土器・石器が出土したが多少無理して図示した。杭列だけの遺構であるため杭が中心となることはやむをえなかった。

a）土器（Fig. 10—1～8）

砂層やシガラミの中から弥生式土器～土師器皿（糸切り）までの時期が出土したが、そのほとんどが磨滅している。

Fig. 10—1は弥生中期甕形土器の底部である。磨滅は受けていない。表面の調整もていねいなハケ目調整を行なっている。2・3・4は須恵器、2・3は坏身で2が須恵Ⅲb、3は須恵Ⅳあろう。4は赤焼きの須恵器と呼ばれている高坏脚部の坏部接合部分で両側に透し部分が認められる。5は土師器皿（糸切り）である。内外とも赤褐色を呈し、胎土は3～4mmの砂粒を含む。ロクロ回転は右回転で指ナデで仕上げている。6は瓦器である。スリ鉢と思われる。7は魚住式土器と称せられるもので、口縁部が玉縁状を呈し丸みを持つ。8は龍泉系窯青磁碗である。1～3は砂層（Ⅹ層）、4～7はシガラミ中（Ⅵ層から出土）に竹・小枝とともに出土。8は砂層（Ⅻ層）から出土した。

b）石器（Fig. 10—9～11）

石器も土器同様に砂層から少量出土した。9は黒耀石の末端部を切断した剥片である。両側辺に二次加工が認められるが、多少ローリングを受けているのでこの時に加わった力によるものかもしれない。パテナは古く、剥離方向も一定している。10も黒耀石の剥片である。自然面を持つ剥片調整剥片であろう。ローリングは受けていない。11は花崗岩製の磨石である。端部に打撃痕が認められる。

c）杭

杭は全体で 353本検出した。このほとんどが丸木杭であるが、他の部材（建築部材の代用とか農工具が混在）はまったく出土しなかった。

本遺跡では杭が最大の遺物であり、他の遺物の数は少なく、時期を決定しうる遺物は、杭列という遺構の性格上無に等しいものであった。出土した杭の総数は 353本である。A列が35本、C列が34本で、杭列の主体となるB列からは 284本である。

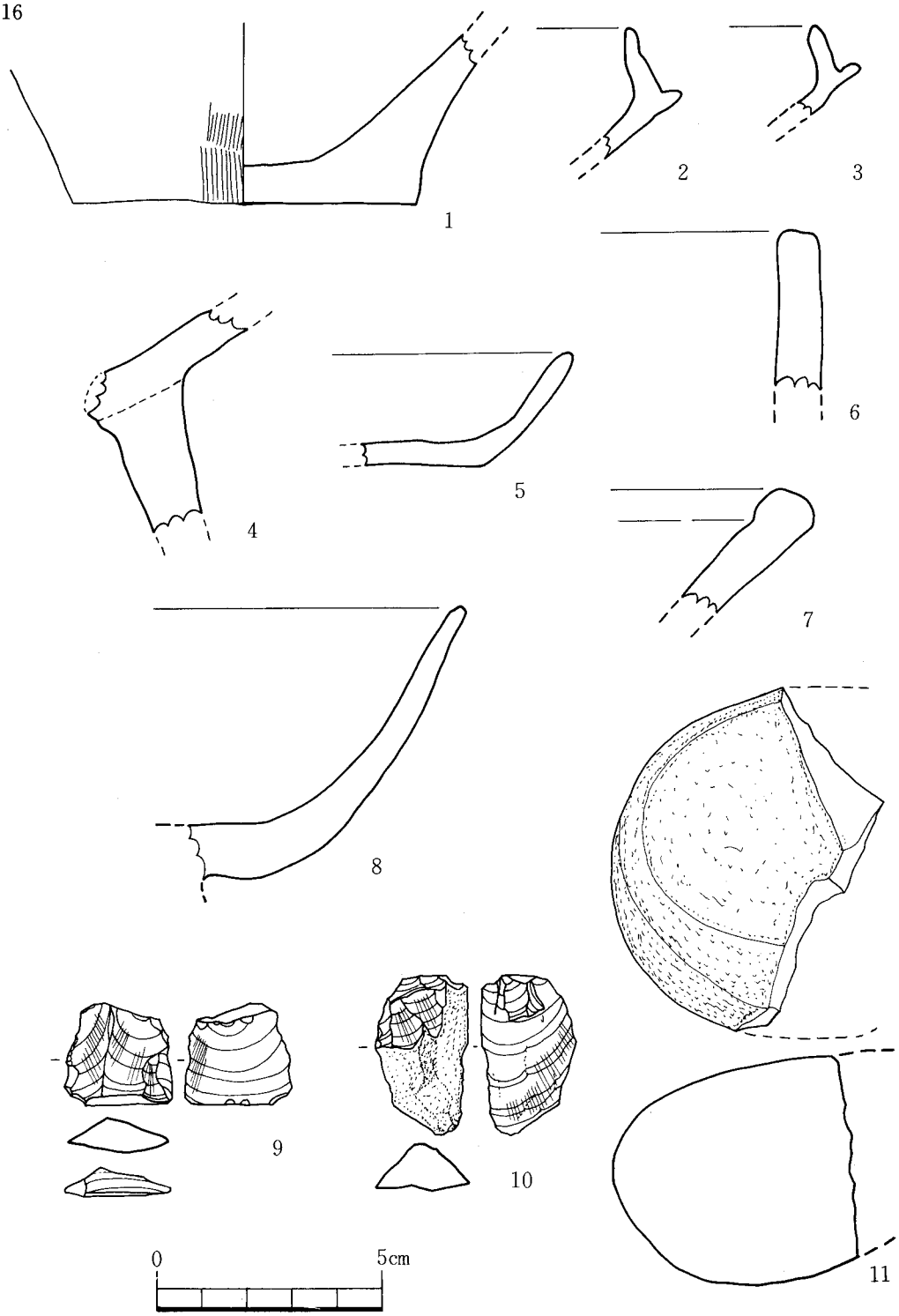


Fig. 10　遺物実測図（縮尺 2/3）

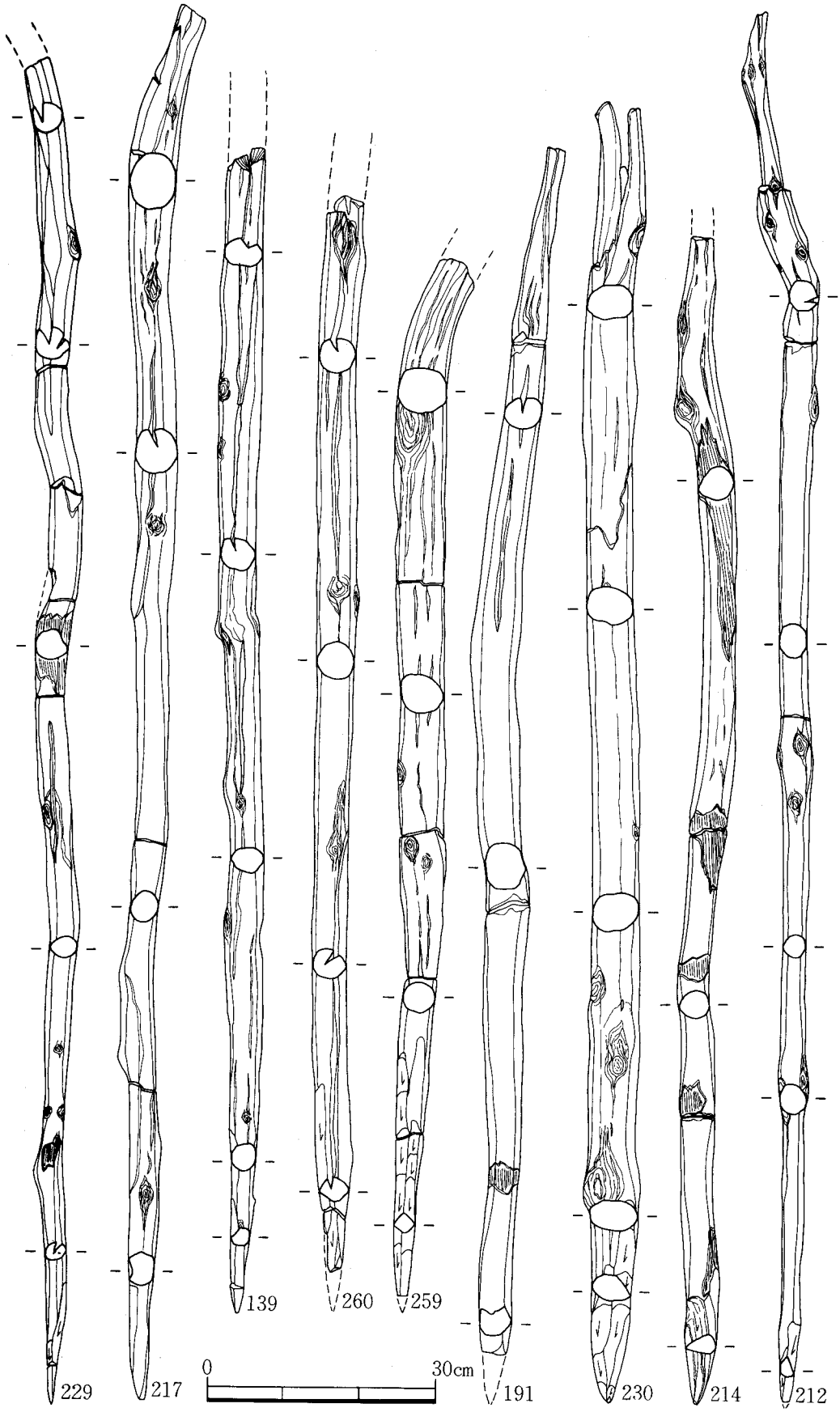


Fig. 11　杭実測図—1　(縮尺 1/8)

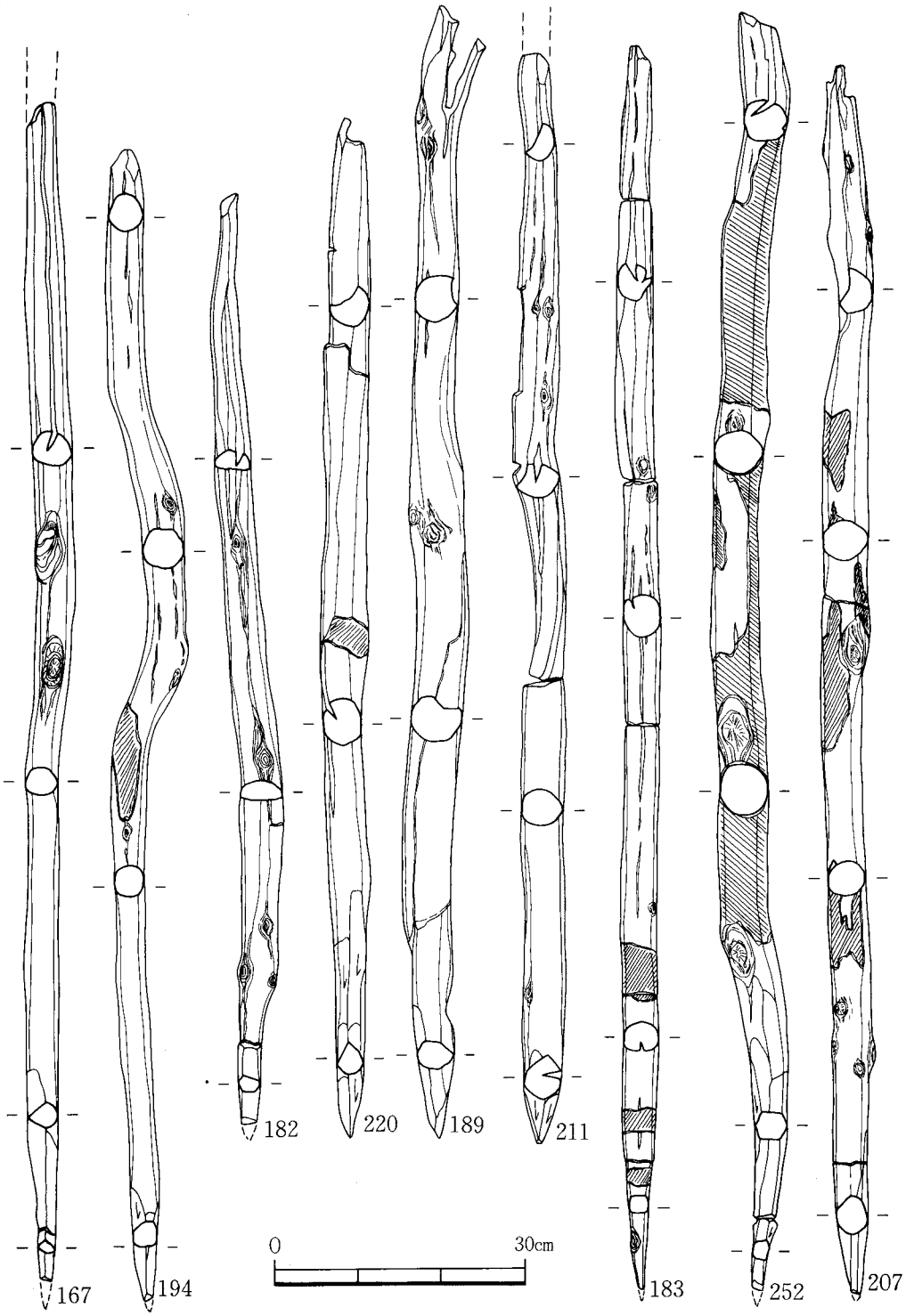


Fig. 12　杭実測図―2　(縮尺 1/8)

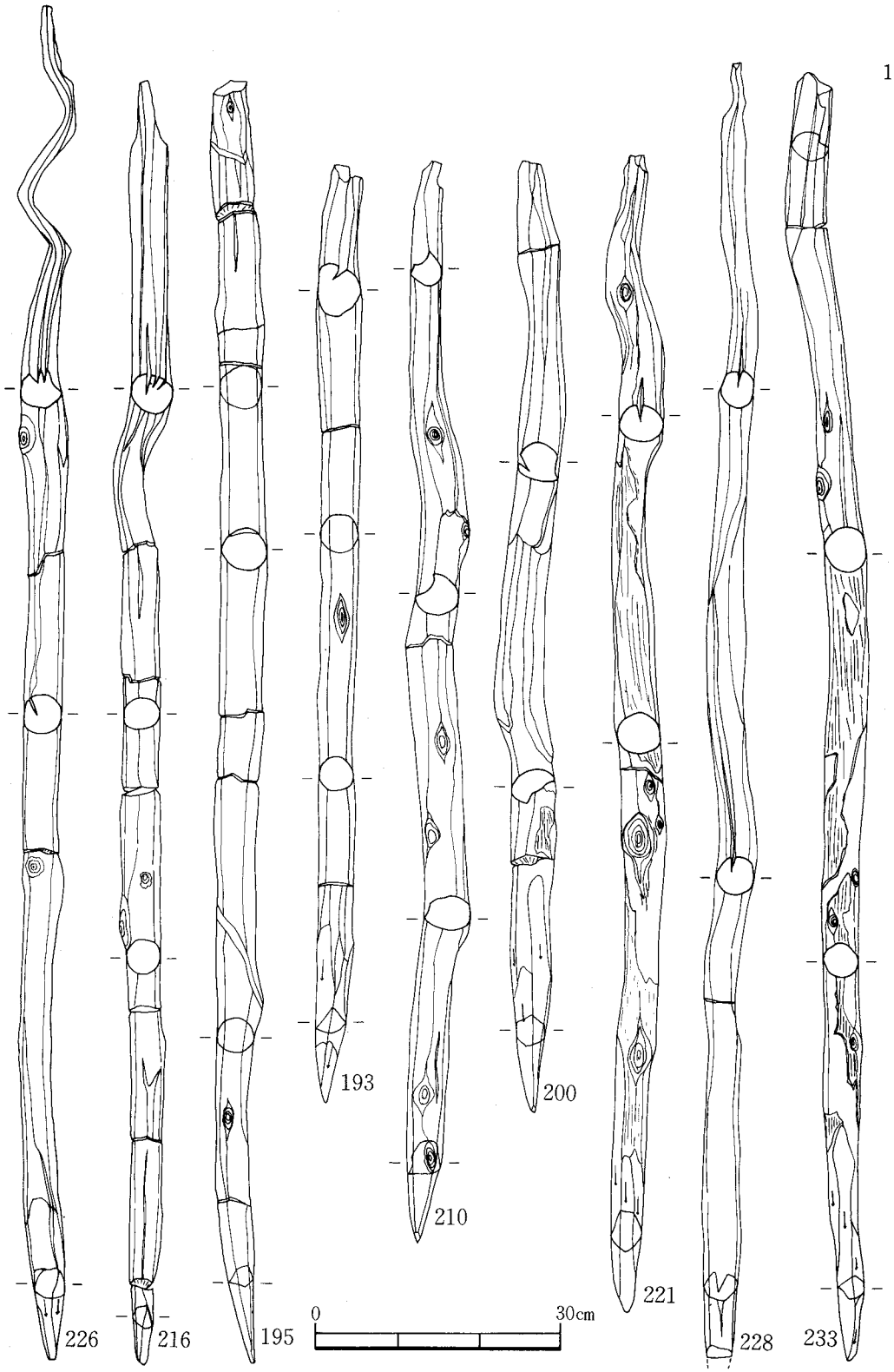


Fig. 13 杭実測図—3 (縮尺1/8)

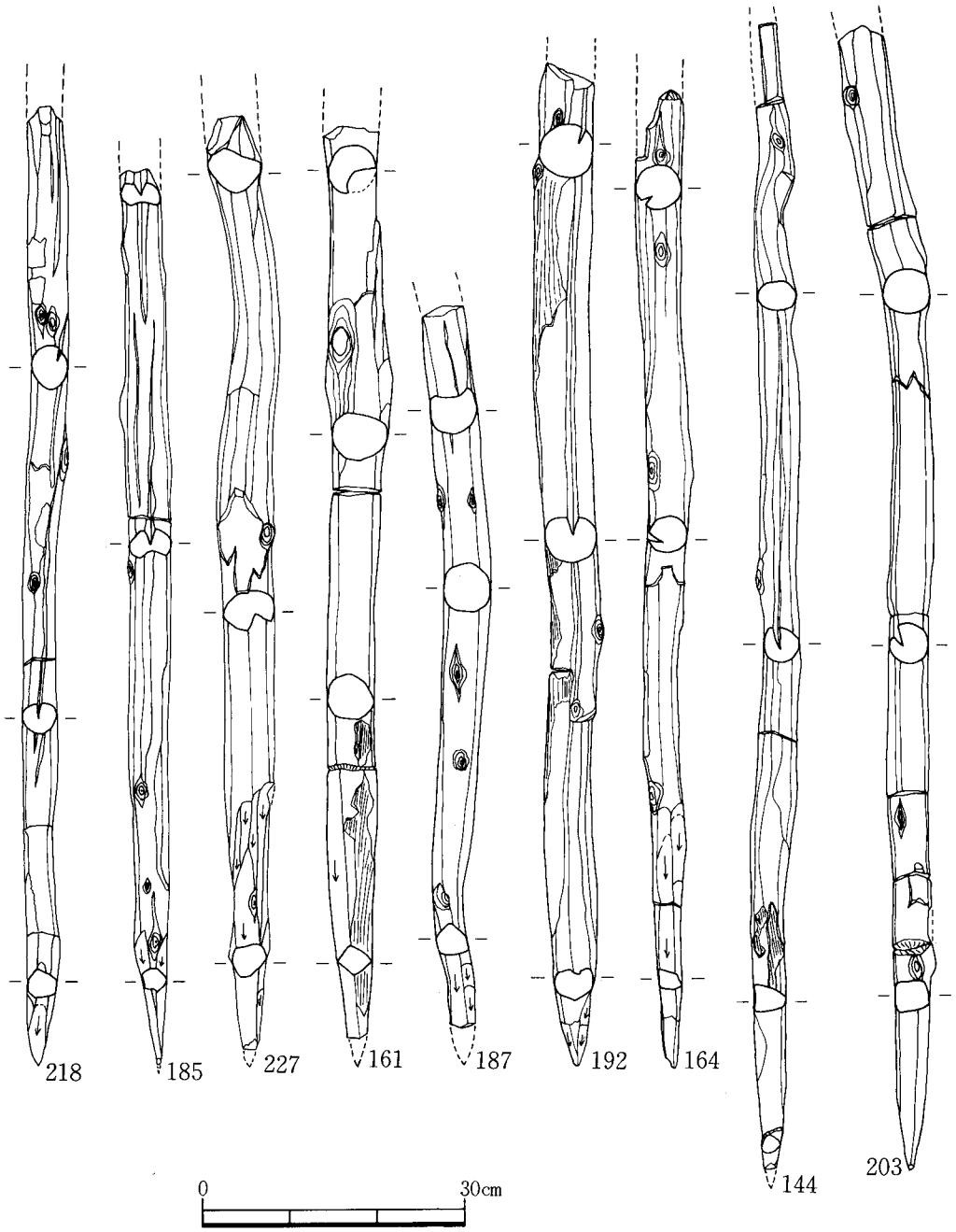


Fig. 14　杭実測図—4　(縮尺 1/8)

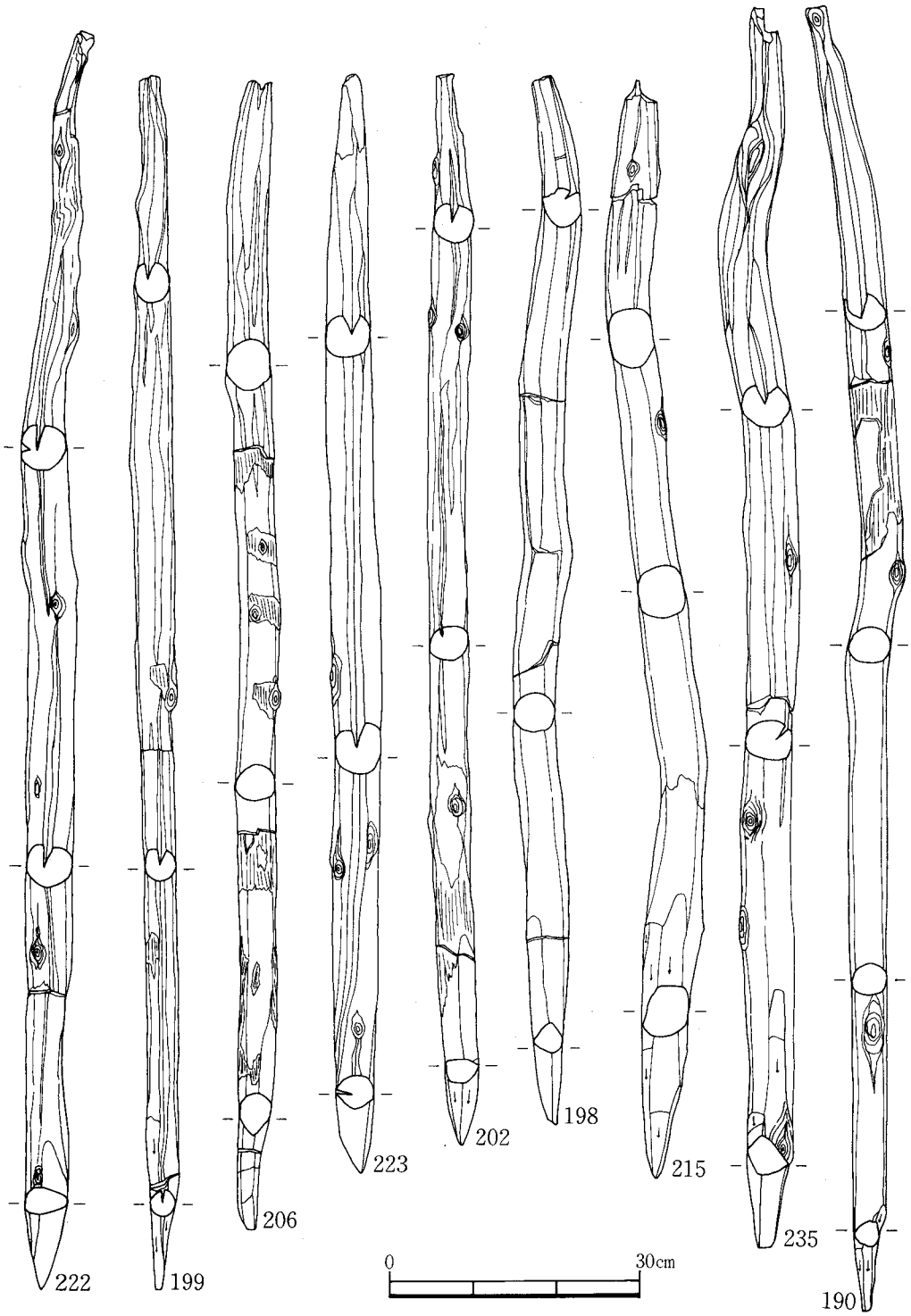


Fig. 15　杭実測図—5　(縮尺 1/8)

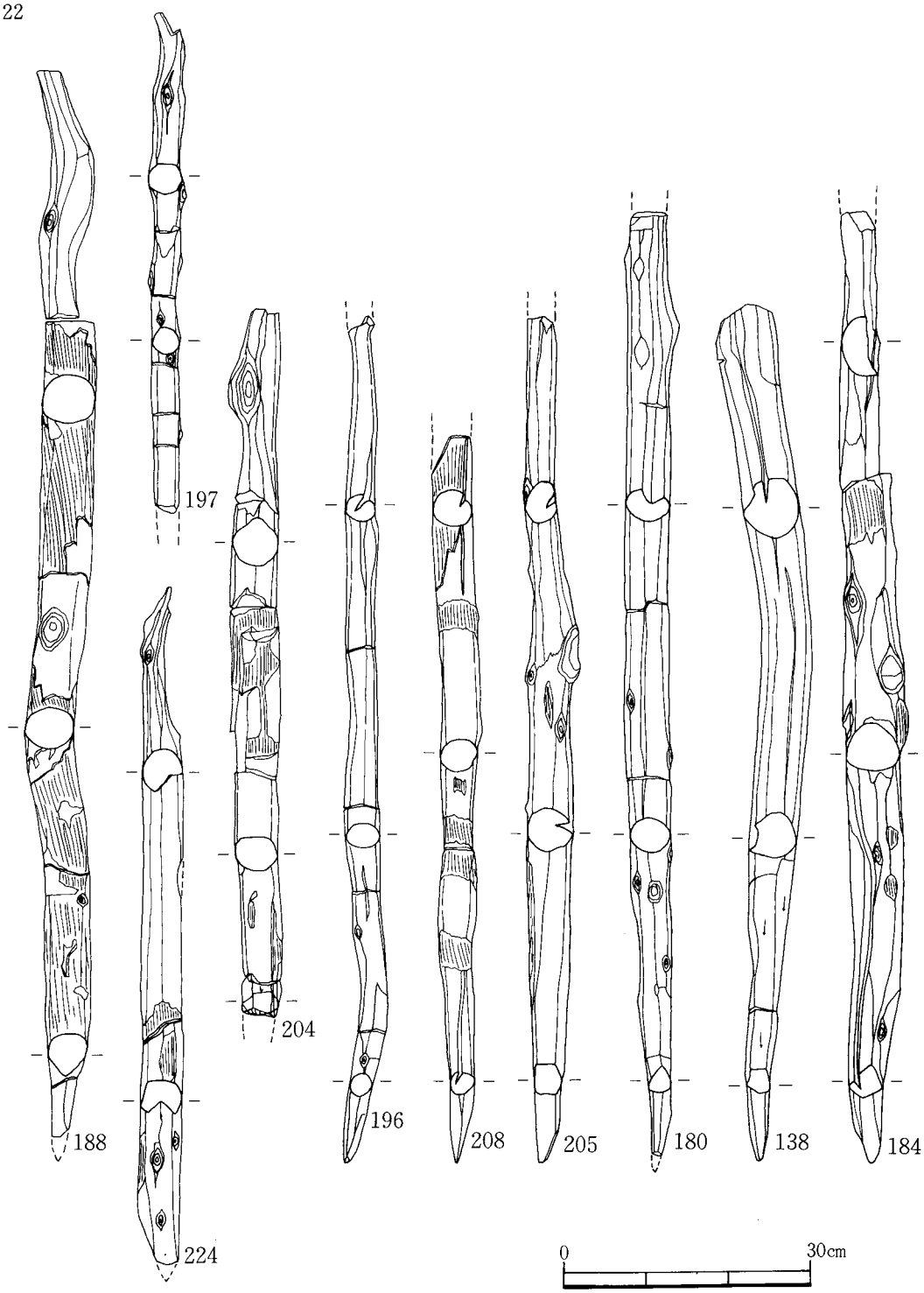


Fig. 16　杭実測図—6　(縮尺 1/8)

図示した杭は、55本で総数の約6分の1の割合である。その中で打撃痕のある完形品が54点出土しており、図示した中に9、19、20、26、37、41、44、45の8点がある。これらの完形品から杭列が打込まれた土層が明らかとなるし、標高によってもこの堤防状遺構がどの時期に位置するかの一つの手がかりとなる。また杭列に編んであるシガラミとの組合せによっても4つのタイプに区分される。杭はそのほとんどが丸木杭であるが堤防状遺構の主要杭の長さ、径と護岸用の補助杭の長さ、径との比較は、主要杭列の長さが180cm程度、径が5cm～9cm、これに対して護岸用の補助杭は50cm未満、径も3cm未満である。直径の5cm以上が180本、5cm未満が173本、長さ150cm以上が141本、150cm未満が212本ある。この資料によっても主要杭と補助杭との区別ができる。

4．小　結

第1地点でのまとめとして堤防状遺構と結論づけたが時期的には出土土器が少量でそれも二次堆積によるものであるため決定づけられなかった。ただシガラミの中から一番新しい土器として糸切り土師器皿が出土していることから中世より新しいものであることは結論づけられるであろう。杭列で明らかとなったことはシガラミによる杭の打込み方の相違である。1本が単独である場合はシガラミにより固定化される例、2本を単位として交差する打込みにより固定させる例、数本により一直線に打込み、その部分を特に強く固定させる例である。シガラミも小枝・竹・ワラ等を使用しているが、北半分は竹、南半分は小枝・ワラが主体をなす。特に北半分の竹の使用方法は、張出し部分との接続や、横の杭との接続を考えられており縦横に編み込んでいることである。またシガラミ自体上下2段に形成され、構築されている。また杭の中にも樹種の相違が認められる。樹種鑑定は行なっていないがおそらくカシとマツであろう。

杭の中に打撃痕のある完形品が54点もあることは、遺構の上端から下端までほぼその様相をとらえることができたことは遺構の性格をきめる上で重要であった。これにより主要杭列と補助杭との区別がとらえられ、水流がどちらの方向へ流れていたかが判明できた。

御笠川(石堂川)は大友氏の石堂川工事前は那珂川の方向に流路があったと言われている。また古地図にも条里が非常に良く残っている地区であるが、比恵台地の末端部である山王附近を境にしてかなりの蛇行が認められ、現博多駅と調査地点の間から住吉神社の方向へ流れていたと思われる。これらのことから堤防状遺構の構築時期は中世以後と考えられ、この一帯で石堂川の水を制圧することができたのは更に新しい時期と考えられる。

第２地点

公団駅東三丁目遺跡の調査開始以前に西側にて造成工事が行なわれており、杭列が発見されたため緊急に対策を講じ、公団の調査前に発掘調査を行なうことにした。

公団駅東三丁目遺跡と同一遺跡の範疇にとらえることができ、駅東三丁目遺跡から検出される杭列につづくもので同じ堤防状遺構と考えられた。公団駅東三丁目遺跡を第１地点とし、道路をはさんだ神山ビルを第２地点とし、付編として付加えた。

１．土　層

基本的には、第１地点の土層と同じであるが、ＰＬ．13でもみられるごとく部分的に、砂がかなりの厚さで堆積している。基本的には下記の層序が基準になる。

第Ⅰ層　客土
第Ⅱ層　灰褐色粘土層(水田耕作土)
第Ⅲ層　黄褐色粘土層(床土)
第Ⅳ層　茶褐色粘土層(Ⅲ層とⅣ層の間に砂の間層)
第Ⅴ層　暗褐色粘土層
第Ⅵ層　青灰色シルト
第Ⅶ層　細砂
第Ⅷ層　泥炭層
(荒砂によって流されている部分がある。)
第Ⅸ層　青白色と泥炭の互層
第Ⅹ層　黄色味をおびた砂層

この層序を第１地点の層序と比較するとⅠ、Ⅱ、Ⅲ層は現代面の客土、耕作土、床土で変化はない。Ⅳ層は第１地点のⅤ層に、Ⅴ層はⅥ層に地定できる。Ⅶ層以降は第１地点でⅫ層、Ⅷ層がⅩⅢ層、Ⅸ層がⅩⅣ・ⅩⅤ層、Ⅹ層がⅩⅥ層となる。第１地点のⅧ層からⅪ層までは第２地点のⅥ層に比定できるが、この部分には荒砂が多量に堆積していることとⅥ層自体青灰色のシルトと泥炭層との互層部分であるため第１地点のⅧ層からⅪ層までがこのⅥ層に比定できると思われる。ゆえに基本的には第１地点の層序とかかわりがなく、水の流れによって形成された土層(沖積地の形成、河川の流れのあり方を物語っている)である。Ⅵ層にみられた荒砂の堆積は第１地点地面側で同様の層序が認められており部分的及び時期的に水の流れが急激に流れる部分があったものと思われる。

杭列は、第１地点と同様に第Ⅳ層茶褐色粘土層より打込まれている。この第２地点ではシガラミは検出できていないが、第１地点同様にⅤ層、Ⅵ層がシガラミを形成する層位であったものと思われ、部分的に荒砂によって流されたものと思われる。現在の湧水点はⅩ層の黄味をおびた砂層（標高1.34m）で御笠川（石堂川）の水位と同じである。

ボーリングデーターと地質学資料によると地表下−0.6mまで砂質粘土、−1.40mまで中砂、−3.40mまでシルト混り砂、−3.70mまでが火山灰質細砂、−4.60mまでがシルト混り中砂、及び微粒砂、中粒砂、−5.50mまでが砂質粘土、−7.80mまで礫混り粗砂で(及び中粒砂)この

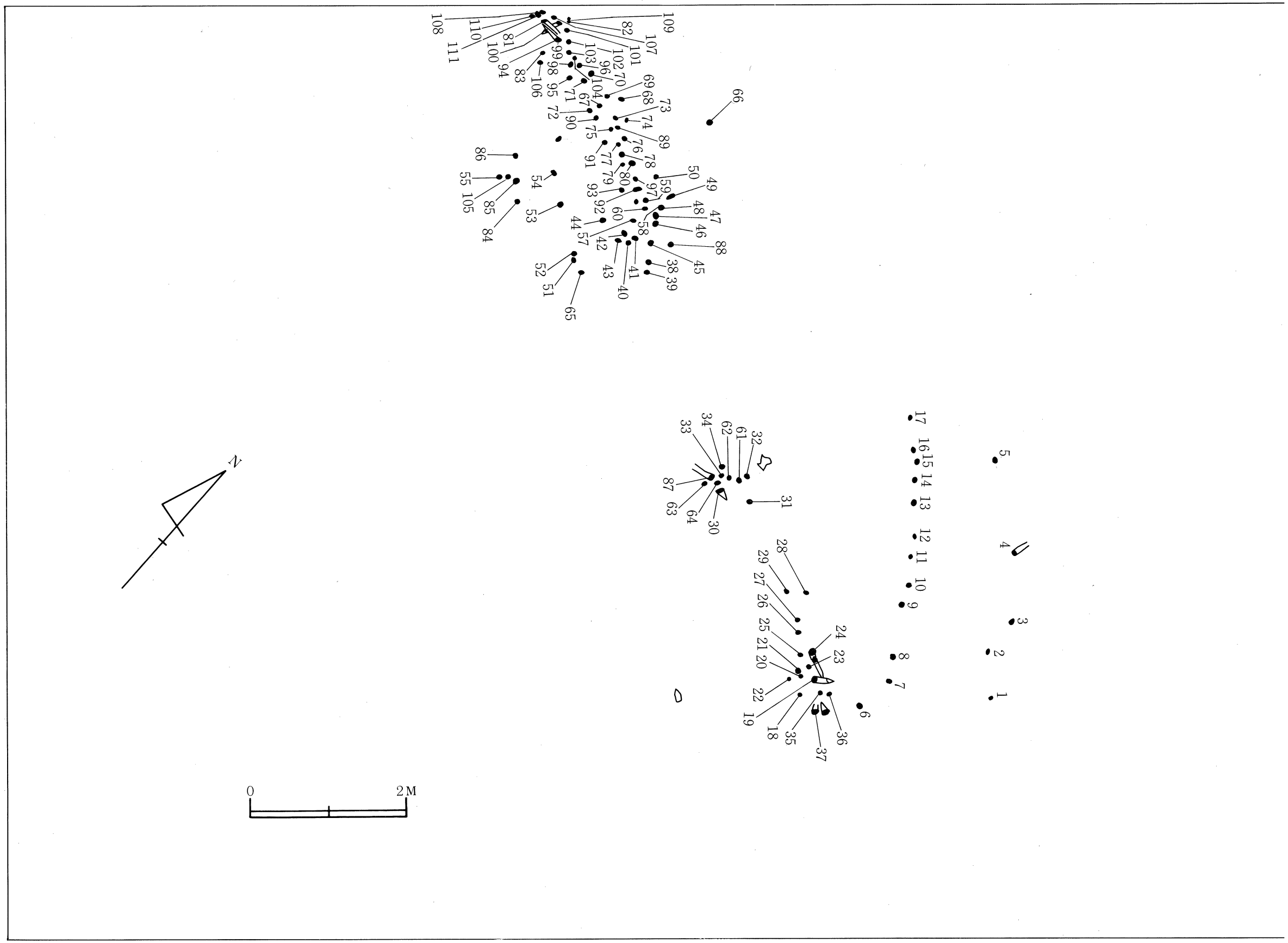


Fig. 17　第２地点遺構配置図（縮尺 1/100）

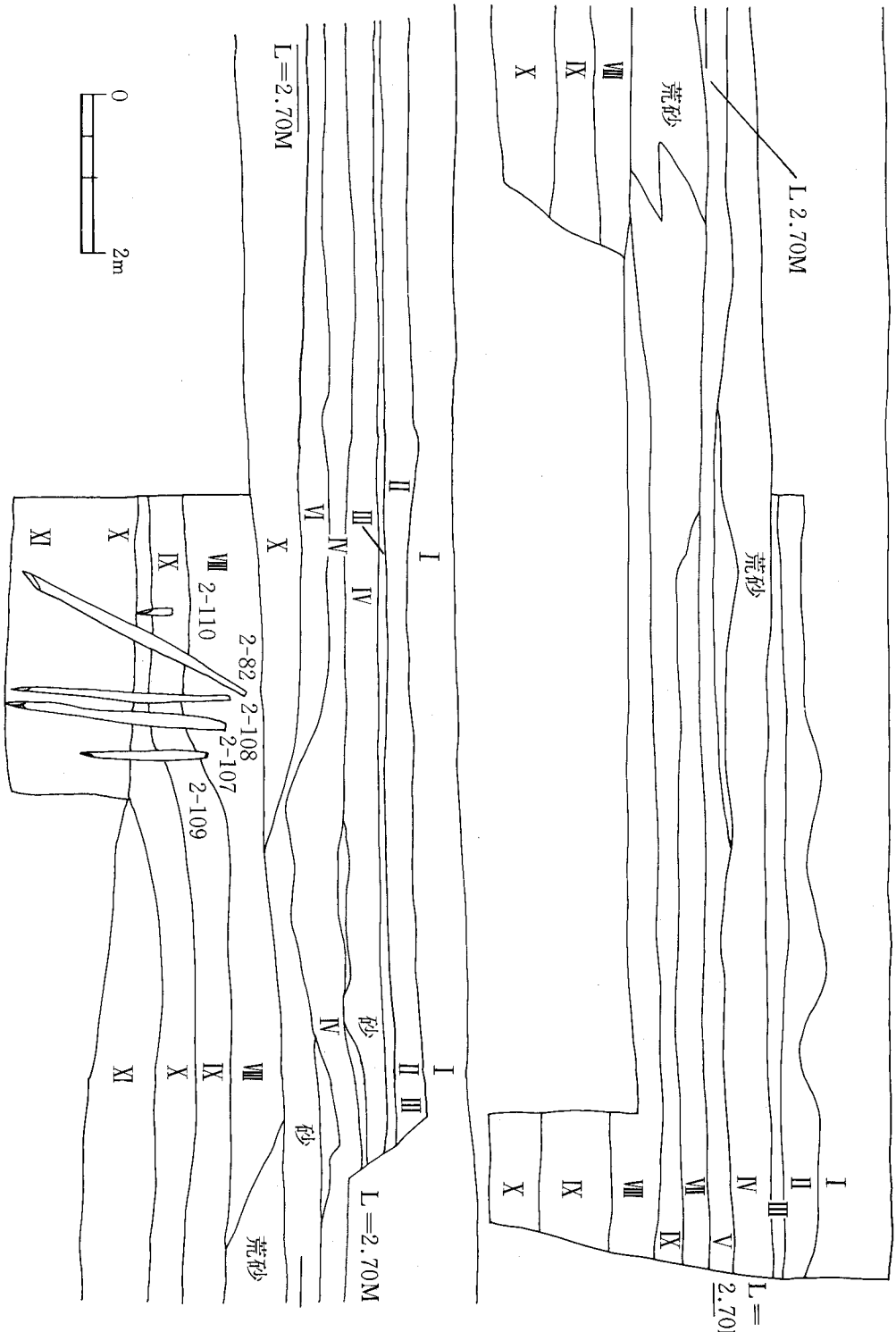


Fig. 18　第２地点土層図・杭列見透し図（縮尺 1/40）

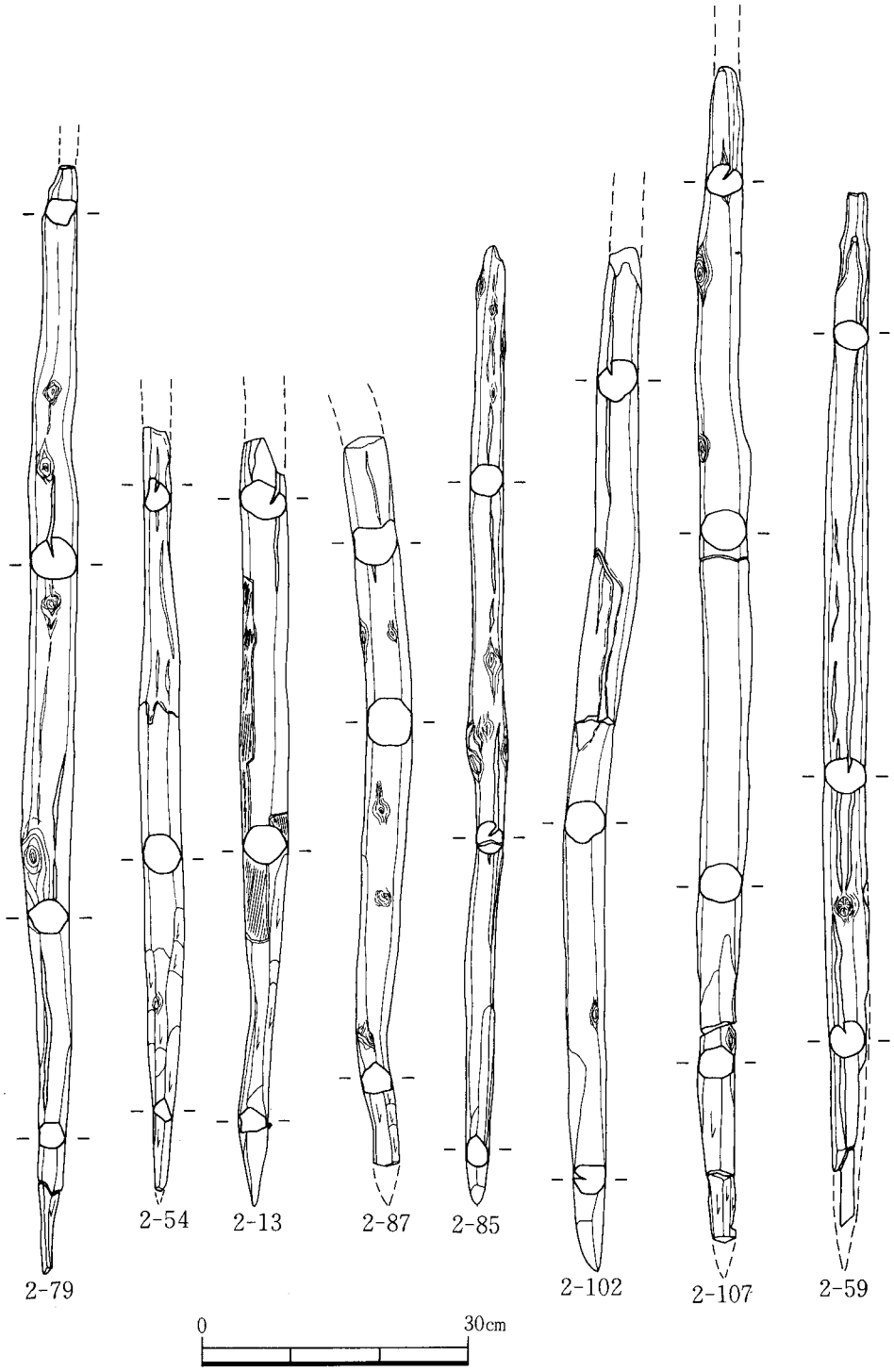


Fig. 19　第２地点杭実測図―1　(縮尺 1/8)

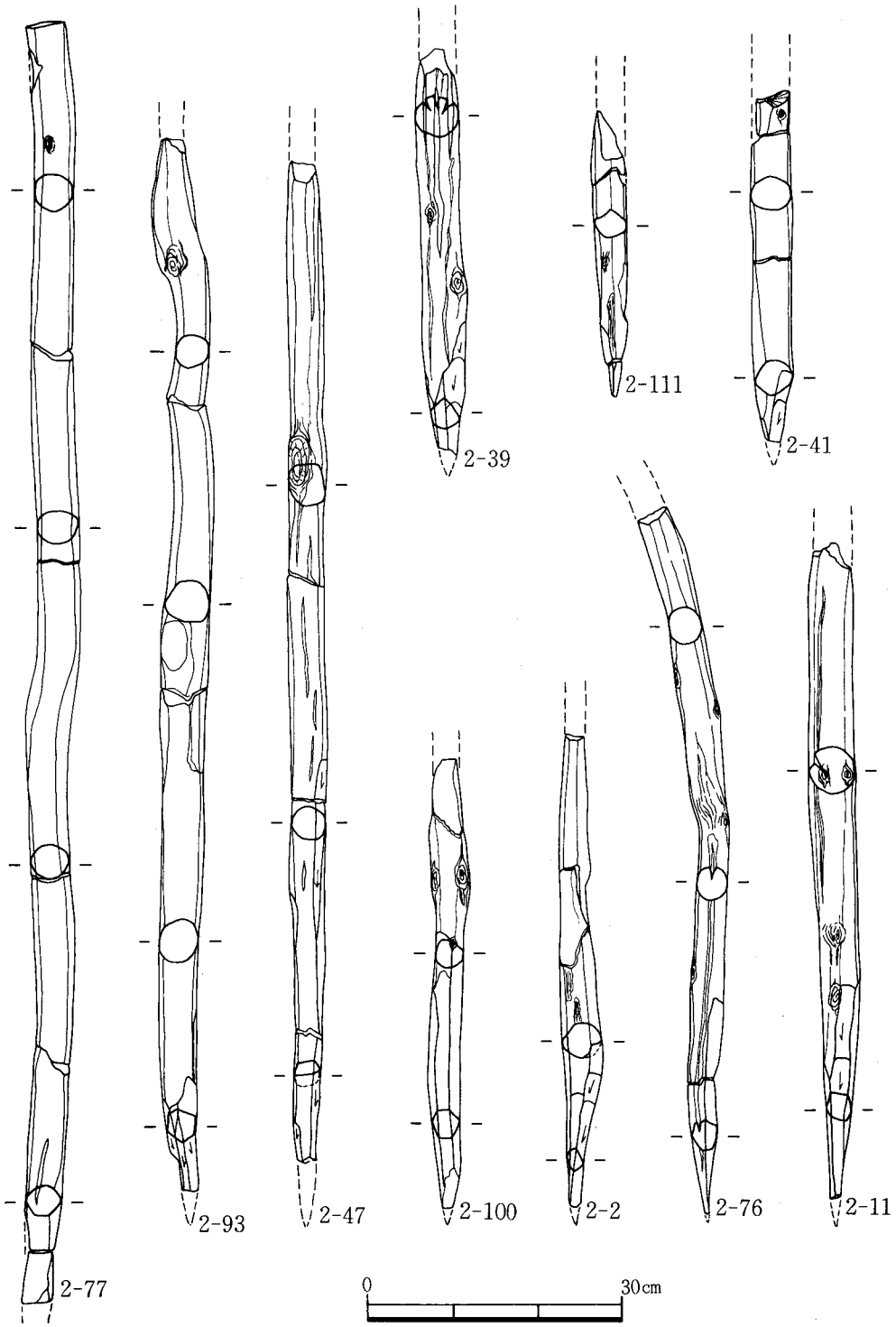


Fig. 20　第2地点杭実測図—2　(縮尺 1/8)

下は第三紀層となっている。第１地点、第２地点とも杭列の下端は、シルト混り砂、中粒砂中に位置している。

２．遺　構

Fig.17、18にみるごとく第1地点と同様に南東から北西にかけて111本の杭が打込まれている。まだ北西部には杭列がつづくものと思われる。杭列は、途中で２ヵ所とぎれておりており、意識して空間を作っているものか、水流によって流されたものかは不明である。ほぼ中央部に２列に並んでいる所は第１地点と同様である。その周辺部に補助用杭列があることも第１地点と同様であろう。Fig.17の杭列番号１～５、６～17の２段の杭列は18～34までの杭列の補助用杭列で護岸のためか、再度打込まれたものであろう。ただこの杭列の両側にまったく杭列のない部分が2.5mほどあり、補助杭等もこの部分で終了している所から水の取入口、排出口の可能性もある。これの北西側につづく杭列はさらに北西側に延びていると思われるが範囲外であるため不明である。この杭列も基本的には２列の杭列からなる堤防状遺構で両側に護岸用の杭列が並ぶ。第１地点の杭列の左側に流れがある。これのつづきである第２地点も杭列の左側に流れがあったものであろう。

３．出土遺物

a）土器・石器

砂層中、泥炭層より小片であるが弥生式土器、須恵器、土師器皿(糸切り)、青磁片等が出土しているが図示できるものはなかった。これも杭列遺構の特殊性で、時期を決定するものはないが、一番新しい遺物は土師器皿（糸切り）で、これも第１地点と同じである。

b）杭

111本の杭が出土した。主要杭列は５cm～７cmの丸木杭でほとんどが長さ100cmをこえるものが主である。これに対して護岸用の杭列は５cm未満で長さも100cm以下であることは注目にあたいする。これは第１地点でも同じである。

４．小　結

第２地点も第１地点と同様に堤防状遺構のつづきで、さらに護岸用の補助杭も第１地点と同様に打込まれている。第２地点での特徴は２ヵ所に杭列がとだえているところが水の取入口、排出口と考えられる部分がある。杭もほとんど丸木杭であるが、２点ほど板材と割材がある。径も主要杭列は径が５cm以上、長さが100cm以上のものでこれも第１地点と同様である。

V まとめ

本文で報告した杭列遺構のまとめにあたり、福岡市域内における低湿地調査の既況にふれておきたい。現在まで調査された遺跡のうち、報告書が刊行されているものを一覧表にまとめるとTab. 1のようになる。これ以外でも福岡平野では板付周辺の那珂君休第2次（1984年報告書刊行予定）・那珂久平[注㉞]・野多目後田（現在調査中）、早良平野では四箇周辺[注㉞]、田村、飯盛地区では圃場整備事業にともなう調査[注㉟]（吉武遺跡群・1981年以来継続）などがある。

1967年の板付市住建設にともなう調査以来板付周辺での緊急調査が継続されているが、小範囲の調査による検出側が多い。このように狭少な調査が多いため遺構の一部を検出するといった場合が大部分で、面的な広がりが把握できるものは少ない。従って水田区画の面積を提示できるものも少ない。また、水路・杭列として統一した用語の中には個別の遺構の性格の差を包括的に取扱っている。

この表を年代順に大別すると縄文時代（1）・弥生時代（21）・古墳時代（15）・古代～中世（13）の4時期に分けることができる。

縄文晩期の板付G—7a・7b地点は、台地と沖積地との境を流れる水路に井堰をもうけ、揚水して水口に取排水の水を調節する施設がある。東西は畦畔によって水田を区画し、南北の区画は確認されていないが、1区画が6～10×50m以上（500㎡以上）と大きい。それに木製農具（両手鍬・えぶの未製品）・石包丁・炭化米がセットになっており、佐賀県菜畑遺跡[注㊱]を除けば最古期の段階で整備された水利施設・水田区画をもっていたことになる。

弥生前期ではG—7a・7b地点のほか板付Ⅱ区J—23～26のように沖積地への進出がはじまり、中期以降この傾向は一層顕著になる。井堰などの水利施設の規模も大きくなり、技術の進歩を裏付けている。これら西側沖積地に対し、環濠集落をのせる板付台地の東側端部E—5・6、E—5b地点では縄文晩期の旧河川に弥生前期の段階で水利施設が構築され、水田稲作がはじまる。また板付台地南側のB—12b・c地点では丘陵端部に北流する旧河道があり、縄文晩期（夜臼式土器）以降の遺物が包含されている。G—7a・7b地点やE—5・6、E—5b地点と同様な立地を呈しており、弥生前期初頭以降の水田稲作が行なわれていたことが予想できる。また、板付遺跡から1.0km東の諸岡丘陵では丘陵東斜面（G区）で縄文晩期（夜臼式）の竪穴住居址が検出され、隣接地（F区[注㊲]）で縄文晩期(夜臼式)以降の包含層が認められることから、諸岡川を水系とした水田稲作が少なくとも弥生前期以降展開されていたことが推定できよう。

那珂丘陵の先端部に位置する瑞穂では水田址は検出されていないが、丘陵端部に沿って護岸

用杭列がつづき、木製農具（諸手鍬他）が出土しており、弥生前期での水田稲作が知れる。

早良平野では鶴町・拾六町ツイジなどがこれにあたる。いずれも丘陵端部に位置し、縄文晩期（夜臼式）以降の土器や木製農具が出土しており、弥生前期での水田稲作が確認されている。弥生の水田区画は板付E―5・6地点地点の220㎡以上の他規模のわかるものが少ない。

水田経営の画期は古墳時代前期にある。福岡平野では三筑で用水路・井堰・水口・水田区画の関係がわかる事例が報告されている。[注㊳] 板付周辺ではD―7b地点・D―10a・10b地点・那珂深ヲサなどがあり、水利施設の構築技術が一段と進み、井堰の規模も拡大する。D―10a・10bは多量の小型丸底壺完形品が出土し、祭祀行事の知れる遺跡である。

早良平野では原深町・鶴町・四箇などがこの例で、原深町の井堰は水位を50cm以上あげて水路に分水する能力を有している。用水路の長さは50～70m以上と長い。鶴町では建築部材を利用した柵状の護岸杭列を9mと13m構築している。水田区画は30～50㎡程度ものが多い。1983年調査された那珂久平では幅40mの旧河道に15,000本以上の杭を配した大規模なアーチ状の井堰を構築・改修しており、これが弥生後期とすれば水田稲作にともなう水利施設の技術の進展と規模の拡大は古墳前期より更に遡ることになる。

古代～中世の水田址の検出例も多い。三筑での水田区画は20～150㎡と均一でないが、那珂深ヲサでは水田址に人の足跡だけでなく牛の痕跡も認められ、古代以降牛耕の導入が確認されている。この他条里方向と一致する杭列・溝が検出された遺跡もあるが調査例は少ない。

このような調査例のうち今回の杭列遺構と対比できる資料は早良平野の四箇J-10a・f、鶴町くらいであろう。四箇J-10a・f地点は旧河道の東岸に沿って杭列が長さ35m以上つづいている。2列の護岸用杭列で堤防状遺構を構築する。遺構の残存状態は良好でないが建築部材等を横木に使用している。鶴町では柵状の護岸用杭列の残りが良い。旧河道の東岸沿いに長さ4m越す横木を使用した堤防状遺構が検出されている。四箇J―10a・f地点・鶴町とも横木を固定する立杭に1mを越えるものはない。

駅東3丁目の杭列遺構は幅1.2m間に立杭を連続して打ち込み、上端から30～50cmの間に小枝・小竹・ワラなどを柵状に組み連結させて堤防状遺構を構築する。長さは50m以上もつづくが、西側の数ヵ所に立杭による張り出し部を作る。立杭は上端に打撃痕を残すものがあり、標高3.8～3.5mを測る。柵の上部は標高3.3～3mとなり、これが杭列構築時の水位と考えられる。横木はほとんど使用されない点と立杭の長さが1.5mを越えるものが大半を占める点が他例と異なる。これは長大な杭を連続して打ち込み上部を柵状に連結させることで横木の使用を省略したものであろう。水の流れが杭列の西側とすれば西側への張し出し部は本流に対し鈍角に構築されており、水の流れを弱め堤防状遺構本体を保護する役割を果していることになる。西側の杭列の遺存が良好でないのはこれを裏付けるものと考えてよい。

Tab. 1　福岡市低湿地調査一覧表

No	平野	遺跡		遺跡 水路	杭列	井堰	溜淵	水口	水田址	畦畔	足あと	遺物	時期（m）	立地	標高（m）	備考	文献
1	福岡平野	板付周辺	Ⅰ区D16～17	○	○	—	—	—	—	—	—	夜臼式・弥生土器	弥生前期前半	丘陵端部	7.0以下（水面）		⑫
2			Ⅱ区J23～26	○	○	○	—	—	—	○矢板	—	〃　〃	〃　〃　〃	沖積地	7.0　（水田）		
3			Ⅱ区G24～26	○	○	—	—	—	—	—	—	弥生土器・木器	〃 中期中葉	〃	7.5　（水面）		
4			Ⅲ区OPQ	○	○	○	—	—	—	—	—	〃　〃	〃　〃 後半	〃	7.0　（川底）		
5			Ⅱ区JK25	○	○	—	—	—	—	○	—	〃　〃	〃 後期前半	〃	7.8　（水面）		
6			Ⅳ区MOP	○	○	—	—	—	—	—	—	瓦器・青磁	中世	〃	7.0　（杭上端）		
7			B—12a	○	○	—	—	—	—	—	—	弥生土器・須恵器	弥生～古墳	〃	9.0　（〃）		⑬
8			H—5	○	—	—	—	—	—	—	—	〃　・木器	弥生中期	丘陵端部			⑭
9			G—7a・b	○	○	○	—	○	○	○	○	夜臼式・木器・炭化米 石包丁	縄文晩期	〃		水田は500㎡以上	⑮
10				○	—	○	—	○	○二面	○矢板	○	弥生土器　〃　〃	弥生前期前半	〃		水口で祭祀	
11				○	—	○	—	○	—	—	—	〃　〃	〃　〃 後半				
12			D—10a	○	○	—	○	—	—	—	—	土師器　〃	古墳前期	〃		祭祀	⑯
13			E—5・6	○	○	○	○	—	—	—	—	弥生土器　〃	弥生後期	〃	7.2　（川底）		⑰
14			E—5b	○	○	○	—	○	○	—	—	〃	弥生前期前半	〃	7.7　（水田面）	水口で祭祀	⑱
15				○	—	—	—	○	○	○	—	〃	〃　〃 後半	〃		水田は220㎡以上	
16				○	—	—	—	—	—	○	—	土師器・青磁	中世	〃	8.2　（水田面）		
17			D—7a	○	○	○	—	○	○二面	○	—	土師器・木器	古墳前期	沖積地	8.3　（〃）		
18				—	—	—	—	—	○	—	—	〃	中世	〃			
19			D—10b	○	—	—	—	—	—	—	—	土師器・木器	古墳前期			祭祀	
20			G—8a	—	—	○	—	—	—	—	—	弥生土器	弥生中期	〃			
21				○	○	—	—	—	○	—	—	須恵器・瓦	奈良	〃		木樋付設	
22			B—12b・c	○	○	—	—	—	—	—	—	夜臼式・弥生土器	弥生前期	丘陵端部			⑲
23				—	—	—	—	—	○	○	—	土師器皿・白磁	中世(12～13c)	〃			
24				○	—	—	○	—	—	—	—	弥生土器・土師器	弥生～古墳	〃	4.0　（溝底）	祭祀	
25			那珂深ヲサ	○	—		○	—	—	—	—	土師器・木器	古墳前期	〃	4.2　（〃）		⑳
26				○	○	○	—	○	○	○	○	土師器皿・白磁	中世	〃	5.5　（〃）		
27			那珂君休	○	○	—	—	—	—	—	—	〃	古代		4.8　（溝底）	条里方向と一致	㉑
28		三筑		○	—	○	—	—	—	—	—	弥生土器・木器・石包丁	弥生前期	丘陵端部	10～11（川底）		㉒
29				○	—	○	○	○	○	○	○	土師器・木器	古墳 〃	〃		祭祀	
30				○	○	—	—	○	○	○	—	青磁・白磁	中世	〃	10.9　（川底）		
31		野多目前田		○	○	—	—	—	—	—	—	須恵器・瓦	奈良～平安	丘陵端部			㉓
32				○	○	○	○	—	—	—	—	青磁・北宋銭	中世(13～14c)	〃			
33				○	—	○	—	○	○	○	—		近世	〃			
34		端穂		○	○	—	○	—	—	—	—	夜臼式・弥生土器・木器	弥生前期	〃	3.0　（杭上端）		㉔
35				○	○	—	○	—	—	—	—	土師器・須恵器	古墳	丘陵上	3.8　（溝底）	梁状遺構	
36	早良平野	下山門		—	○	—	—	—	—	○矢板	—	須恵器・木器	6c 中～平安	沖積地		条里方向と一致	㉕
37		十郎川		○	○	—	—	—	—	—	—	夜臼式・弥生土器・木器	弥生前期	〃			㉖
38		拾六町ツイジ		—	—	—	○	—	—	—	—	夜臼式・弥生土器・木器	弥生前期初頭	丘陵端部	2.6～3.2（溝底）		㉗
39				○	○	○	○	○	—	—	—	弥生土器・木器	〃　〃 後半	〃	2.1～2.3（〃）		
40				○	○	○	○	○	—	—	—	〃　〃	〃 後期	〃	2.7　（〃）		
41				—	○	—	○	—	○	○	—	土師器　〃	古墳前期	沖積地	3.1～3.2 （水田面）		
42				—	○	—	—	—	○	—	—	青磁	中世	〃			
43		湯納		○	○	○	—	—	—	—	—	土師器・木器	古墳前期	〃			㉘
44		牟多田		○	○	○	—	—	—	—	—	土師器	古墳前期	沖積地	6.0～6.6（溝底）		㉙
45		原深町		○	○	○	—	—	—	—	—	土師器・木器	〃	〃	4.2　（〃）	祭祀	㉚
46		鶴町		○	○	—	—	—	—	—	—	夜臼式・弥生土器・木器	弥生前期	〃			
47				○	○	○	—	—	—	—	—	弥生土器・土師器・木器	〃 中～古墳	〃	10.0　（杭上端）		㉛
48				—	—	—	—	—	—	○矢板	—	土師器	古墳以降	〃			㉛
49		田村		○	○	○	—	—	—	—	—	弥生土器・木器	弥生中期	〃			㉜
50		四箇J-10a・f		○	○	—	—	—	—	—	—	弥生土器・土師器・須恵器	弥生～古墳	〃	20.3（杭上端）		㉝

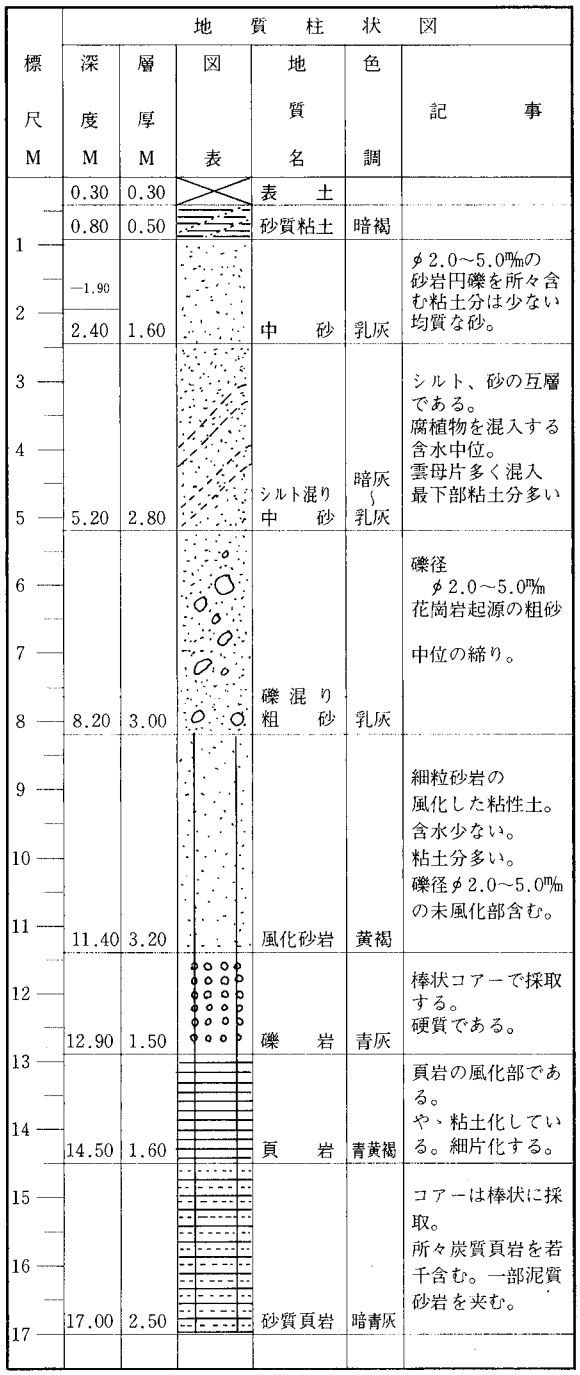
立地の面では沖積地のうち下山門が砂丘後背地にもうけた杭列という点で類似する。Fig.35は今回調査地区内の土質柱状図である。砂やシルト混りの砂層が厚く堆積し－1.90mに湧水点がある。御笠川の左岸近くに位置しており、取水源に近接し、表層が砂に覆われているために長大な杭を多用することが要請されたのであろう。取水源に近いことが遺物が残存しにくい条件にあったことを示している。出土遺物は古墳時代の土師器と中世の土師器皿・青磁の2時期に分れられるが、いずれも細片で堤防状遺構の時期を決定するには資料不足である。古墳時代の護岸用杭列が横木を多用する構築例とは異なり、より簡潔な構築法によっていることを考慮すれば更に新しい時期とも考えられよう。

以上のように護岸用の杭列を連続して配置することにより堤防状遺構を構築したと考えたが東側の杭列（B列）は四箇J-10a・f地点のように分水した水路としたものであろう。堤防状遺構から20m西へ別の杭列が相対している。基礎工事のため一部しか確認していないが、この幅20mの間が主水路となっていたのであろうと思われる。

次に調査地点周辺部の旧地形についてふれておこう。

現在は市街地となっているため旧地形を復原するためには、明治33年陸地測量部の測量図（二万分の一）・昭和初期の

Fig. 21　土層柱状図



地形図・終戦後の都市計画の際の現況図と遺跡の分布等を照合しながら検討するしかない。旧博多駅（明治42年建設）が現在の新博多駅に移転（昭和38年完成）するまでは、調査地点を含めた旧博多駅の南側一帯は条里制のなごりをとどめた田園風景が展開していた。この一帯の水路系統図を作り現況図に重ねたものが別図１である。

那珂台地の先端部(点線で図示した比恵遺跡群)から北西方向へ直線状へのびた水路は、現博多駅構内の北側付近から西側へ屈曲し旧博多駅南側の標高3.5～4.0m の等高線から北へのびることなく西へ流路をとり那珂川の支流博多川へ流入している。

現在の御笠川（石堂川）は旧比恵川とよばれ、那珂川へ流入していたとされている。これによれば、天正年間臼杵鑑賡の開削により現在の流路をとることになったという。
これは近世の地誌類に受けつがれ、近世の絵図には那珂川へ流入する[註㊳]旧比恵川を図示している。

一方、地下鉄工事に伴なう発掘調査により博多駅前約300m 以南は河砂で覆れていることが確められ[注㊵]、その位置は『福岡市文化財地図』(中部・南部）に博多遺跡群の南限として図示している。その地点は別図１のように旧博多駅南側の標高3.5～4.0m の地形変挽点と一致する。これが旧比恵川の右岸に相当すれば、博多遺跡群とした中世の博多のまちは旧比恵川を南限として区画されていたことになる。

旧比恵川の河道は、直線状へ北西方向にのびた水路が西側へ屈曲する地形変換点と旧博多駅南側の標高3.5～4.0m の間に求めることができ、その間はほぼ2.5m の等高線内におさまる。このように流路が西へ屈曲した幅約40m 、標高2.5m 以内の範囲内に旧比恵川の流路を求めることができ、博多遺跡群がこれによって南を限られていることが認められる。別図１では御笠川（石堂川）と那珂川（博多川）の間を東から西へ流れていた旧比恵川の流路の想定範囲を網目で表現した。かって博多駅交通センターから出土した弥生終末期の土器はこの旧河道の想定範囲内におさまることになる。また、中山平次郎が矢倉門の付近から夥[注㊶]しく青磁が出土したと報告したのは[注㊷]、博多遺跡群内におさまるところから肯首できる。また、旧比恵川の想定範囲とした南側の地形変換点が福岡平野における条里制施行の北限にあたることが理解できる。[注㊸]

調査地点は、那珂台地先端部から北西方向へ樹枝状にのびた水路の一つに近接して位置おり護岸用杭列を配した堤防状遺構はその延長線上にあたる。そして、御笠川の取水口に近接しているため、流れが急で遺物が残存しうるような状況でなく、淀状を呈していたと推定しうる現博多駅付近とは景観を異にしていたと考えられることができる。

那珂台地の端部には端穂遺跡のように護岸用の杭列を構築した水列施設による水田稲作が弥生時代前期から展開されていることから、那珂台地先端部と旧比恵川想定範囲南側の間の沖積低湿地には弥生時代以降の水田稲作や条里制と関連する遺構が遺存していることが予想されるところから、今後の調査に期待したい。

注

①福岡市教育委員会『福岡市文化財地図』(中部・南部)　1981
②—(1)吉岡完祐編『瑞穂—福岡市比恵台遺跡』　日本住宅公団　1982
—(2)『比恵遺跡—第6次調査・遺構編—』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第94集　1983
③鏡山猛「環溝住居址小論(一)～(四)」史淵67・68・74・78　九州大学　1956～1959
④　注②—(2)　前掲書
⑤中原志外顕編『見捨てられた春住遺跡—縄文時代晩期終末へのアプローチ』　筑紫野古代史研究会々報第2集　1977
⑥　注②—(2)前掲書　⑦　注②—(2)前掲書
⑧—(1)『高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅰ—藤崎遺跡—』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第62集　1981
—(2)『博多Ⅰ』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第66集　1981
⑨『埋蔵文化財遺跡地名表　総集編』　福岡市埋蔵文化調査財報告書第12集　1971
⑩『青銅の武器—日本金属文化の黎明—』展図録　九州歴史資料館　1980
⑪『福岡地盤図』　福岡地盤図作成グループ(九州地質調査業協会)　1981
⑫『板付—市営住宅建設に伴う発掘調査報告1971～1974—』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集　1976
⑬『板付周辺遺跡調査報告書(3)』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第36集　1976
⑭『板付周辺遺跡調査報告書(4)』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第38集　1977
⑮—(1)『板付遺跡調査概報—1977～78年度—』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第49集　1979
—(2)山崎純男「福岡市板付遺跡の成立と展開」「歴史公論74　雄山閣　1981
⑯『板付周辺遺跡調査報告書(6)』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第57集　1980
⑰『板付—板付会館建設に伴う発掘調査報告書』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第73集　1981
⑱『板付周辺遺跡調査報告書(8)—1981年度調査概要—』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第83集　1982
⑲『板付周辺遺跡調査報告書(9)—1982年度調査概要—』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第98集　1983
⑳『那珂深ヲサⅠ・Ⅱ』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第72集・82集　1981・1982
㉑「那珂君休遺跡」　注⑳前掲書所収
㉒『学校建設地内遺跡調査報告書—三筑遺跡・次郎丸高石遺跡—』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第69集　1981
㉓『野多目前田遺跡調査概報』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第85集　1982
㉔　注②—(1)前掲書。
㉕『下山門遺跡』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第23集　1973
㉖吉岡完祐編『十郎川(一)(二)—福岡市早良平野石丸・古川遺跡—』　住宅・都市整備公団　1982　早良
㉗『拾六町ツイジ遺跡—城原小学校建設地内遺跡調査報告書—』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第92集　1983
㉘「福岡市西区大字拾六町所在の遺跡」『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第3集　福岡県教育委員会　1976
㉙『牟多田遺跡—福岡市西区大字野方字牟多田壱岐中学校造成地区調査報告—』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第27集　1974
㉚『原深町遺跡』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第71集　1981
㉛『鶴町遺跡』(本文冊・別冊)　福岡市埋蔵文化財調査報告書第37集　1976
㉜『田村遺跡Ⅰ』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第89集　1982
㉝『四箇周辺遺跡調査報告書(1)』　福岡市埋蔵文化財調査報告書第42集　1977
㉞藤原宏志「プラント・オパール分析法とその応用—先史時代の水田址探査—」　考古学ジャーナル227　1984
㉟『月刊文化財発掘出土情報』84—2　ジャパン通信社　(1984)所収
㊱『菜畑—佐賀県唐津市における初期稲作遺跡の調査—』　唐津市文化財調査報告書第5集　1982
㊲　注⑬前掲書所収
㊳畑中健一「北部九州の自然環境」　季刊考古学6　雄山閣　1984
㊴貝原篤信『筑前国続風土記』　各著出版　1974
㊵注⑧—1前掲書
㊶橋口達也「博多駅地下工事中出土の網目土器」『宮の前遺跡—福岡市拾町宮の前F地点の調査』
福岡市埋蔵文化財調査報告書第13集(1971)所収
㊷中山平次郎「古代の博多(六)」　考古学雑17—3　1927
㊸日野尚史「筑前国那珂・席田・粕屋・御笠四郡における条里について」　佐賀大学教育学部研究論集24—1　1976

Tab. 2　第１地点杭一覧表-1

(注)杭上端に打撃痕を有するものを完形とし上端の標高を記入した

地点	No	杭の形状	法量(cm) 長	幅	厚	径	樹皮	図	PL	備考
B列	1	○	185			5.0				
	2	○	177			4.5				
	3	○	180			5.0				
	4	○	198			5.0				
	5	○	187			5.5				
	6	○	164			5.5				
	7	○	186			5.0				
	8	○	190			4.0				
	9	○	187			5.0				
	10	○	195			5.0				
	11	○	190			5.0				
	12	○	193			4.0				
	13	○	205			7.0				
	14	○	197			6.5				杭上端の標高　3.759M
	15	○	170			5.0				杭上端の標高　3.745M
	16	○	177			4.0				
	17	○	196			4.0				
	18	○	167			4.5				
	19	○	201			4.0				
	20	○	212			6.0				
	21	○	165			6.0				
	22	○	174			5.0				
	23	○	176			7.0				
	24	○	167			6.0	有り			杭上端の標高　3.712M
	25	○	160			6.0				杭上端の標高　3.693M
	26	○	173			7.0				杭上端の標高　3.716M
	27	○	175			6.0				杭上端の標高　3.70　M
	28	○	192			5.0	有り			
	29	○	176			6.0				
	30	○	189			4.0				
	31	○	28			3.5				
	32	○	157			6.0				杭上端の標高　3.589M
	33	○	168			6.0				
	34	○	132			5.0				
	35	○	180			5.0				
	36	○	123			7.0				
	37	○	113			6.0				
	38	○	113			6.0				
	39	○	147			7.0				
	40	○	155			9.0	有り			杭上端の標高　3.726M
	41	○	108			7.0	有り			
	42	○	148			5.0				
	43	○	100			3.0	有り			
	44	○	114			5.5	有り			
	45	○	183			7.0				
	46	○	155			7.0	有り			
	47	○	70			6.0	有り			杭上端の標高　3.266M
	48	○	165			7.0				
	49	○	136			6.0	有り			
	50	○	50			3.0	有り			杭上端の標高　3.572M
	51	○	141			3.0	有り			
	52	○	130			4.0	有り			
	53	○	102			4.0	有り			杭上端の標高　3.58　M
	54	○	165			4.0	有り			
	55	○	132			3.0	有り			
	56	○	104			4.0	有り			
	57	○	160			7.0				杭上端の標高　3.762M
	58	○	112			3.0	有り			
	59	○	96			3.0	有り			
	60	○	148			5.0				
	61	○	202			3.5				
	62	○	90			3.0				
	63	○	160			5.0				
	64	○	203			6.0	有り			杭上端の標高　3.748M
	65	○	166			7.0				
	66	○	148			4.0				
	67	○	129			6.0				
	68	○	127			5.0	有り			
	69	○	145			5.0	有り			
	70	○	196			6.0	有り			杭上端の標高　3.742M

Tab. 3　第１地点杭一覧表-2

(注)杭上端に打撃痕を有するものを完形とし上端の標高を記入した

地点	No	杭の形状	法量(cm) 長	幅	厚	径	樹皮	図	PL	備考
B列	71	○	150			4.5	有り			
	72	○	162			6.0	有り			
	73	○	172			7.0	有り			
	74	○	177			5.0	有り			
	75	○	138			5.0	有り			
	76	○	165			6.0	有り			
	77	○	50			3.0				杭上端の標高　3.67　M
	78	○	154			6.0				
	79	○	154			5.0	有り			
	80	○	155			6.0	有り			
	81	○	137			4.0	有り			
	82	○	162			4.0				
	83	○	164			5.0	有り			
	84	○	145			6.0	有り			
	85	○	166			5.0	有り			
	86	○	88			5.0				
	87	○	166			3.0				
	88	○	72			4.0				
	89	○	98			4.0				
	90	○	161			6.0				
	91	○	160			4.0				
	92	○	206			5.0				
	93	○	231			5.0				
	94	○	145			4.0				
	95	○	90			5.5				
	96	○	140			4.5				
	97	○	141			4.5				
	98	○	188			4.0	有り			
	99	○	180			4.0				
	100	○	199			5.5				
	101	○	175			5.5				
	102	○	153			2.0				
	103	○	224			5.0				
	104	○	140			4.5				
	105	○	196			5.0	有り			
	106	○	220			3.5				
	107	○	65			4.5	有り			
	108	○	187			4.0	有り			
	109	○	163			6.0				
	110	○	116			3.0				
	111	○	30			3.5				
	112	○	77			6.0				
	113	○	135			4.0	有り			
	114	○	95			4.0				
	115	○	156			4.5	有り			
	116	○	157			5.0	有り			
	117	○	183			4.0	有り			
	118	○	112			5.0				横木
	119	○	126			6.0				杭上端の標高　3.896M
	120	○	170			4.0				
	121	○	190			5.0				
	122	○	175			5.0	有り			3.633M
	123	○	145			7.0	有り			杭上端の標高　3.648M
	124	○	167			4.0	有り			
	125	○	152			5.0				杭上端の標高　2.78　M
	126	○	120			5.0				
	127	○	93			3.0				
	128	○	134			2.5				
	129	○	116			4.0				
	130	○	85			3.0				杭上端の標高　2.938M
	131	○	30			4.0				横木
	132	○	132			4.0	有り			
	133	○	166			4.0	有り			
	134	○	119			5.0				
	135	○	111			4.0				
	136	○	76			5.5				横木
	137	○	131			4.5				
	138	○	113			7.0	有り	Fig.16	17	杭上端の標高　3.525M
	139	○	166			5.0		Fig.11	15	杭上端の標高　3.456M
	140	○	134			5.0	有り			

Tab. 4　第１地点杭一覧表-3

(注)杭上端に打撃痕を有するものを完形とし上端の標高を記入した

地点	No	杭の形状	法量(cm) 長	幅	厚	径	樹皮	図	PL	備考
B列	141	○	133			4.5				
	142	○	112			4.0	有り			
	143	○	163			7.0				
	144	○	128			7.0	有り	Fig.14	16	
	145	○	23			6.0				横木
	146	○	150			4.0	有り			
	147	○	82			5.5				
	148	○	120			4.0				
	149	○	126			3.0				
	150	○	73			5.0	有り			
	151	○	107			5.0				
	152	○	90			4.0	有り			
	153	○	73			3.0	有り			
	154	○	104			3.5	有り			
	155	○	108			7.0				
	156	○	100			5.0	有り			
	157	○	92			6.0	有り			
	158	○	126			5.5	有り			杭上端の標高　3.377M
	159	○	167			4.5				
	160	○	134			5.5				杭上端の標高　3.374M
	161	○	98			6.0	有り	Fig.14	16	杭上端の標高　3.308M
	162	○	40			4.5				
	163	○	134			4.5	有り			
	164	○	120			5.0		Fig.14	16	杭上端の標高　3.382M
	165	○	65			4.0				
	166	○	128			4.0				
	167	○	130			5.0		Fig.12	15	杭上端の標高　3.14　M
	168	○	146			5.0	有り			
	169	○	70			3.0				
	170	○	140			4.0				
	171	○	108			4.0				
	172	○	134			4.0				
	173	○	126			4.0				杭上端の標高　3.293M
	174	○	100			4.0	有り			
	175	○	112			3.0	有り			
	176	○	53			3.0	3			
	177	○	133			3.0				
	178	○	120			5.0	有り			
	179	○	128			4.0				杭上端の標高　3.36　M
	180	○	116			4.0		Fig.16	17	
	181	○	121			5.0				
	182	○	112			4.0		Fig.12	15	
	183	○	148			4.5	有り	Fig.12	15	
	184	○	118			6.0		Fig.16	17	
	185	○	97			5.0		Fig.14	16	
	186	○	101			5.0				
	187	○	122			4.0		Fig.14	16	
	188	○	130			5.5		Fig.16	17	
	189	○	135			6.2		Fig.12	15	
	190	○	159			6.2		Fig.15	16	杭上端の標高　3.382M
	191	○	172			5.0		Fig.11	15	
	192	○	115			5.6	有り	Fig.14	16	杭上端の標高　3.393M
	193	○	115			6.0		Fig.13	15	杭上端の標高　3.405M
	194	○	137			5.0		Fig.12	15	杭上端の標高　3.382M
	195	○	163			5.0		Fig.13	15	杭上端の標高　3.478M
	196	○	103			3.0		Fig.16	17	杭上端の標高　3.425M
	197	○	66			3.0		Fig.16	17	
	198	○	124			5.0	有り	Fig.15	16	杭上端の標高　3.415M
	199	○	191			5.0		Fig.15	16	
	200	○	116			4.0		Fig.13	16	
	201	○	143			5.0				
	202	○	128			4.6	有り	Fig.15	16	杭上端の標高　3.355M
	203	○	143			6.0		Fig.14	16	
	204	○	104			3.0		Fig.16	17	
	205	○	103			4.0		Fig.16	17	
	206	○	137			5.0		Fig.15	16	杭上端の標高　3.618M
	207	○	150			5.0		Fig.12	15	
	208	○	110			3.0		Fig.16	17	
	209	○	47			3.0				
	210	○	132			4.0		Fig.13	15	

Tab. 5　第１地点杭一覧表-4

(注)杭上端に打撃痕を有するものを完形とし上端の標高を記入した

地点	No	杭の形状	法量(cm) 長	幅	厚	径	樹皮	図	PL	備考
B列	211	○	130			3.5		Fig.12	15	
	212	○	165			3.0		Fig.11	15	
	213	○	113			5.0				
	214	○	154			4.7		Fig.11	15	杭上端の標高　3.465M
	215	○	130.5			5.5	有り	Fig.15	16	杭上端の標高　3.558M
	216	○	150			5.0		Fig.13	15	杭上端の標高　3.729M
	217	○	178			5.2	有り	Fig.11	15	
	218	○	127			4.0		Fig.14	16	
	219	○	159			5.0				
	220	○	145			5.0		Fig.12	15	
	221	○	140.5			5.3	有り	Fig.13	16	杭上端の標高　3.70　M
	222	○	150			5.4		Fig.15	16	杭上端の標高　3.765M
	223	○	131			5.4	有り	Fig.15	16	杭上端の標高　3.765M
	224	○	81			5.5	有り	Fig.16	17	
	225	○	110			4.5	有り			
	226	○	165			4.2		Fig.13	15	
	227	○	166			4.0		Fig.14	16	
	228	○	175			3.0	有り	Fig.13	16	
	229	○	215			5.0	有り	Fig.11	15	
	230	○	150			5.5		Fig.11	15	杭上端の標高　3.78　M
	231	○	191			3.0				
	232	○	145			4.0	有り			
	233	○	163			5.0	有り	Fig.13	16	杭上端の標高　3.74　M
	234	○	141			5.5	有り			
	235	○	158			8.0	有り	Fig.15	16	杭上端の標高　3.81　M
	236	○	173			7.0	有り			
	237	○	125			4.0	有り			
	238	○	87			5.0	有り			
	239	○	50			5.0				
	240	○	156			4.0	有り			
	241	○	158			4.5				
	242	○	160			5.0	有り			
	243	○	181			5.0				
	244	○	157			4.0	有り			
	245	○	162			5.5	有り			
	246	○	128			5.0	有り			
	247	○	181			7.0	有り			
	248	○	186			5.5	有り			
	249	○	193			6.0	有り			
	250	○	205			7.0				
	251	○	167			5.0				
	252	○	157			4.0	有り	Fig.12	15	杭上端の標高　3.79　M
	253	○	132			4.0				
	254	○	142			5.0				
	255	○	171			5.0	有り			
	256	○	154			5.5				
	257	○	150			4.5	有り			
	258	○	150			4.0				
	259	○	146			6.0	有り	Fig.11	15	杭上端の標高　3.745M
	260	○	152			5.5	有り	Fig.11	15	杭上端の標高　3.79　M
	261	○	186			4.0	有り			
	262	○	189			4.0	有り			
	263	○	215			5.0				
	264	○	178			3.0				
	265	○	86			5.0				
	266	○	50			7.0	有り			
	267	○	68			7.0	有り			
	268	○	112			4.5				
	269	○	186			5.5				
	270	○	175			5.5				
	271	○	170			6.0	有り			
	272	○	155			5.0	有り			
	273	○	133			4.0				
	274	○	123			5.0				
	275	○	139			6.0	有り			
	276	○	144			4.0	有り			
	277	○	123			3.0	有り			
	278	○	126			4.0	有り			
	279	○	130			6.5	有り			
	280	○	166			5.0				

Tab. 6　第１地点杭一覧表-5

(注)杭上端に打撃痕を有するものを完形　し上端の標高を記入した

地点	No	杭の形状	法量(cm) 長	幅	厚	径	樹皮	図	PL	備考
B列	281	○	203			5.5				
	282	○	180			5.0				
	283	○	174			5.0	有り			
	284	○	170			6.0				
	285	○	83			5.0	有り			
	286	○	160			4.0	有り			杭上端の標高　349.6M
	287	○	166			4.0				杭上端の標高　3.708M
	288	○	166			4.0	有り			
	289	○	197			4.0	有り			
	290	○	182			4.0				
	291	○	65			5.5	有り			杭上端の標高赤松か?3.68M
	292	○	164			4.0	有り			
	293	○	57			3.0	有り			赤松か？
	294	○	100.6			6.0	有り			赤松か？
	295	○	70			2.0	有り			
	296	○	80			3.0	有り			
	297	○	87			5.0	有り			赤松か？
	298	○	116			5.0	有り			赤松か？
	299	○	61			3.0	有り			
	300	○	118			4.0	有り			赤松か？
	301	○	100.3			6.0	有り			〃
	302	○	95			3.0	有り			〃
	303	○	170			6.0	有り			
	304	○	69			4.0				
	305	○	101			5.0				
	306	○	113			3.5				
	307	○	105			5.0				
	308	○	52			4.0				
	309	○	113			4.0				
	310	○	37			3.5				
	311	○	115			6.0	有り			
	312	○	79			6.0	有り			
	313	○	77			5.0	有り			
	314	○	123			5.0	有り			
	315	○	168			6.0	有り			
	316	○	123			4.0	有り			
	317	○	157			4.0	有り			
	318	○	148			5.5				
C列	1	○	33			4.0				
	2	○	18			3.0				
	3	○	35			3.0				
	4	○	32			3.0				
	5	○	88			4.0				
	6	○	98			4.0				
	7	○	41			3.0	有り			
	8	○	36			3.0				
	9	○	47			3.0				
	10	○	52			3.0	有り			
	11	○	41			3.0				
	12	○	72			3.0				
	13	○	46			3.0				杭上端の標高　3.593M
	14	○	75			3.0				
	15	○	56			4.5				
	16	○	44			3.5				
	17	○	9			2.0				
	18	○	12			1.5				
	19	○	12			1.5				
	20	○	15.5			2.0				
	21	○	14			2.5				
	22	○	17			2.0				
	23	○	23			3.0	有り			
	24	○	35			3.0				
	25	○	15			2.0				
	26	○	17			2.5				
	27	○	6			1.5				
	28	○	12			2.5				
	29	○	20			2.5				
	30	○	18			2.0				
	31	○	9			2.5				
	32	○	10			1.5				

Tab. 7　第１地点杭一覧表-6

(注)杭上端に打撃痕を有するものを完形とし上端の標高を記入した

地点	No	杭の形状	法量(cm) 長	幅	厚	径	樹皮	図	PL	備考
C列	３３	○	１５			２．０				
	３４	○	１６			３．０				
	３５	○	１１			２．０				

Tab. 8　第２地点杭一覧表-1

(注)杭上端に打撃痕を有するものを完形とし上端の標高を記入した

地点	No	杭の形状	法量(cm) 長	幅	厚	径	樹皮	図	PL	備考
	1	□	47	1.5	5.5					
	2	○	60			4.0		Fig.20	17	
	3	○	13			3.0				
	4	△	37.5	3.0	3.0					
	5	○	15	1.0		3.5				
	6	○	54			4.0	有り			
	7	○	17			2.0				
	8	○	80			4.5				
	9	○	84			5.0	有り			
	10	○	46			4.5				
	11	○	81			5.5		Fig.20	17	
	12	○	27.5			4.0				
	13	○	90			5.0	有り	Fig.19	17	
	14	○	39			4.0				
	15	○	89			4.5				
	16	○	14			4.5				
	17	○	32			4.5				
	18	○	116			5.0				
	19	○	120			5.5				
	20	○	155			5.0				
	21	○	140			5.0				
	22	○	140			5.0				
	23	○	130			5.0				
	24	○	146			5.5				
	25	○	122			6.0				
	26	○	157			6.5				
	27	○	137			5.0				
	28	○	136			5.5				
	29	○	145			5.5				
	30	○	113			7.0				
	31									欠
	32									欠
	33	○	114			5.0				
	34	○	92			6.5	有り			
	35	○	70			6.0				
	36	○	94			6.5				
	37	○	80			6.0				
	38	○	102			3.5				
	39	○	58			4.5		Fig.20		
	40	○	33.5			4.5				
	41	○	49			4.5		Fig.20		
	42	○	70			6.0				
	43	○	50			4.5				
	44	○	32			3.5				
	45	○	107			5.0	有り			
	46	○	138			5.5				
	47	○	132			5.0		Fig.20	17	
	48	○	38			3.0				
	49	○	16			3.0				
	50	○	14			2.5				
	51	○	144			4.0				
	52	○	31			3.5				
	53	○	26			3.5				
	54	○	90			5.0		Fig.19	17	
	55	○	137			4.5				
	56	○	70			4.0				
	57	○	155			7.5	有り			
	58	○	186			6.0				
	59	○	120			4.0		Fig.19	17	
	60	○	150			5.0	有り			
	61	○	89			6.5				
	62	○	110			5.5				
	63	○	41			3.5				
	64	○	50			4.5				
	65	○	44			4.0				
	66	○	20			3.0				
	67	○	113			5.0	有り			
	68	○	152			6.0				
	69	○	128			4.5				
	70	○	143			5				

Tab. 9　第２地点杭一覧表-2

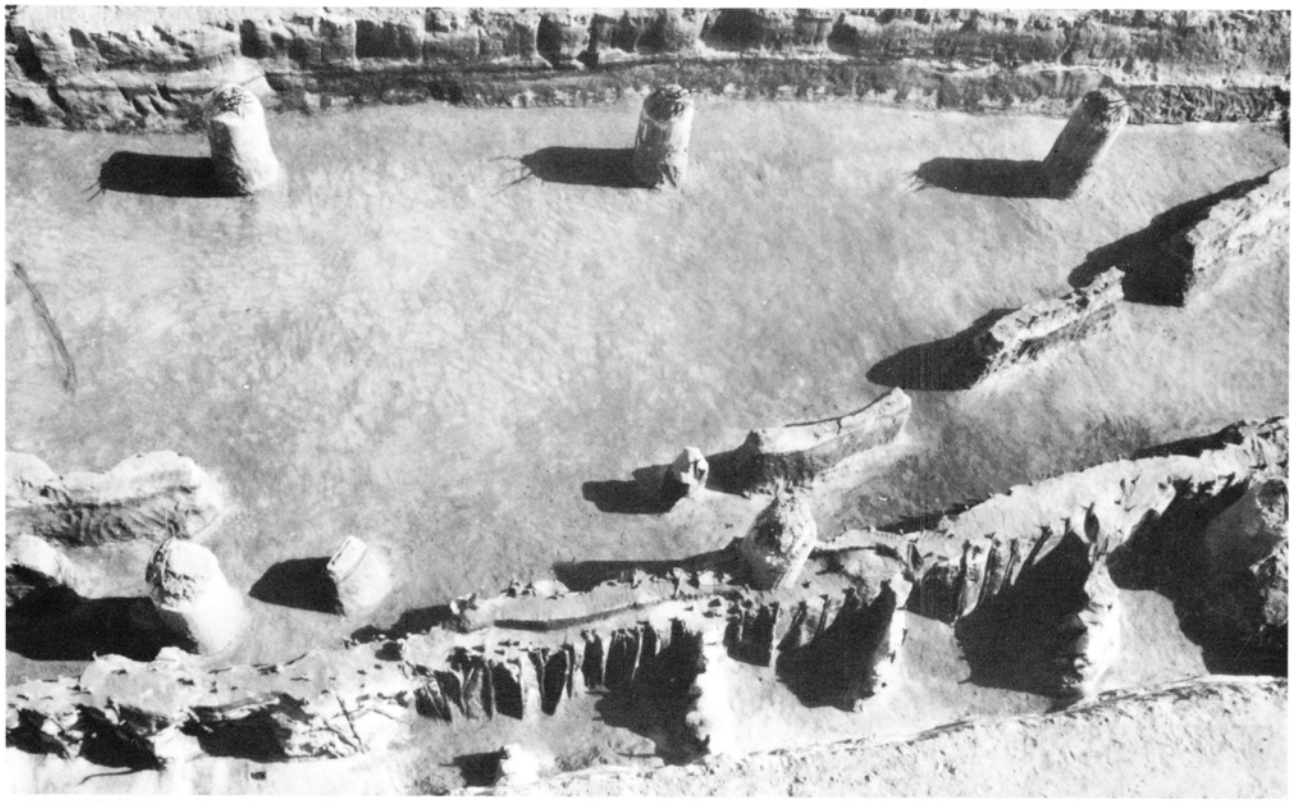
(注)杭上端に打撃痕を有するものを完形とし上端の標高を記入した

地点	No	杭の形状	法量(cm) 長	幅	厚	径	樹皮	図	PL	備考
	71	○	101			4.0				
	72	○	161			7.0	有り			
	73	○	159			5.5				
	74	○	133			4.0				
	75	○	163			6.0				
	76	○	93			3.5	有り	Fig.20	17	
	77	○	152			4.0		Fig.20	17	
	78	○	147			4.5				
	79	○	127			4.5		Fig.19	17	
	80	○	150			4.5				
	81	○	13			5.5				
	82	○	137			4.0				
	83	○	124			6.0	有り			
	84	○	106			3.5				
	85	○	107			3.5		Fig.19	17	
	86	○	88			3.5				
	87	○	85			4.5		Fig.19	17	
	88	○	74			5.0				
	89	○	60			4.5				
	90	○	111			4.0				
	91	○	136			4.0				
	92	○	143			3.5				
	93	○	134			6.0		Fig.20	17	
	94	○	83			6.0	有り			
	95	○	111			4.0				
	96	○	161			4.5				
	97	○	133			4.5				
	98	○	110			5.0				
	99	○	103			4.0				
	100	○	52			3.5		Fig.20	17	
	101	○	134			4.5				
	102	○	117			4.0		Fig.19	17	
	103	○	130			6.5				
	104	○	72			4.0				
	105	○	114			3.5				
	106	○	49			3.0				
	107	○	133			5.0		Fig.19	17	
	108	○	132			4.0				
	109	○	72			4.5				
	110	○	42			3.0				
	111	○	33			3.0		Fig.20		

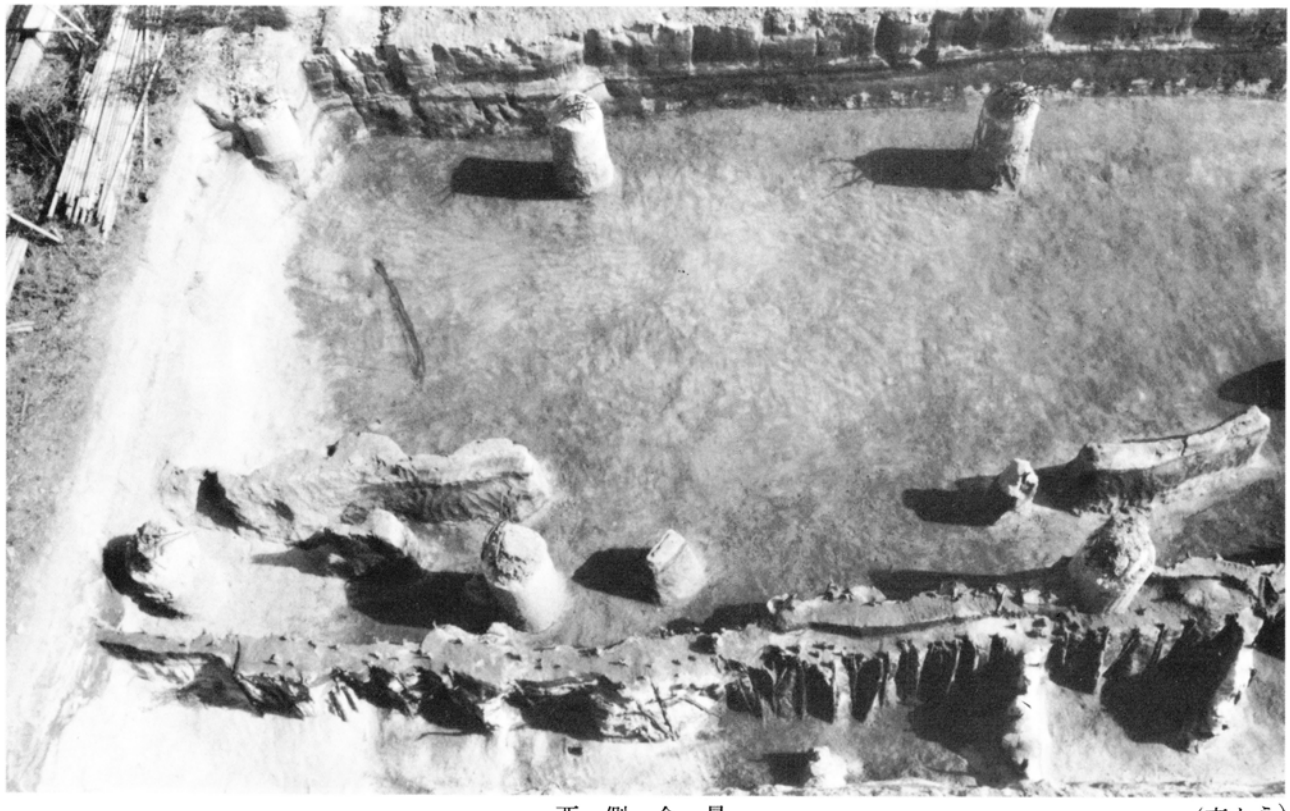
図　　版

杭　列　全　景　　（西から）

B 列杭検出状態　　（南から）



西　側　全　景　　(南から)



西　側　全　景　　(南から)

杭B列とC列全景　（南より）

B　列　全　景　（北西より）

杭・B列全景　（北東より）

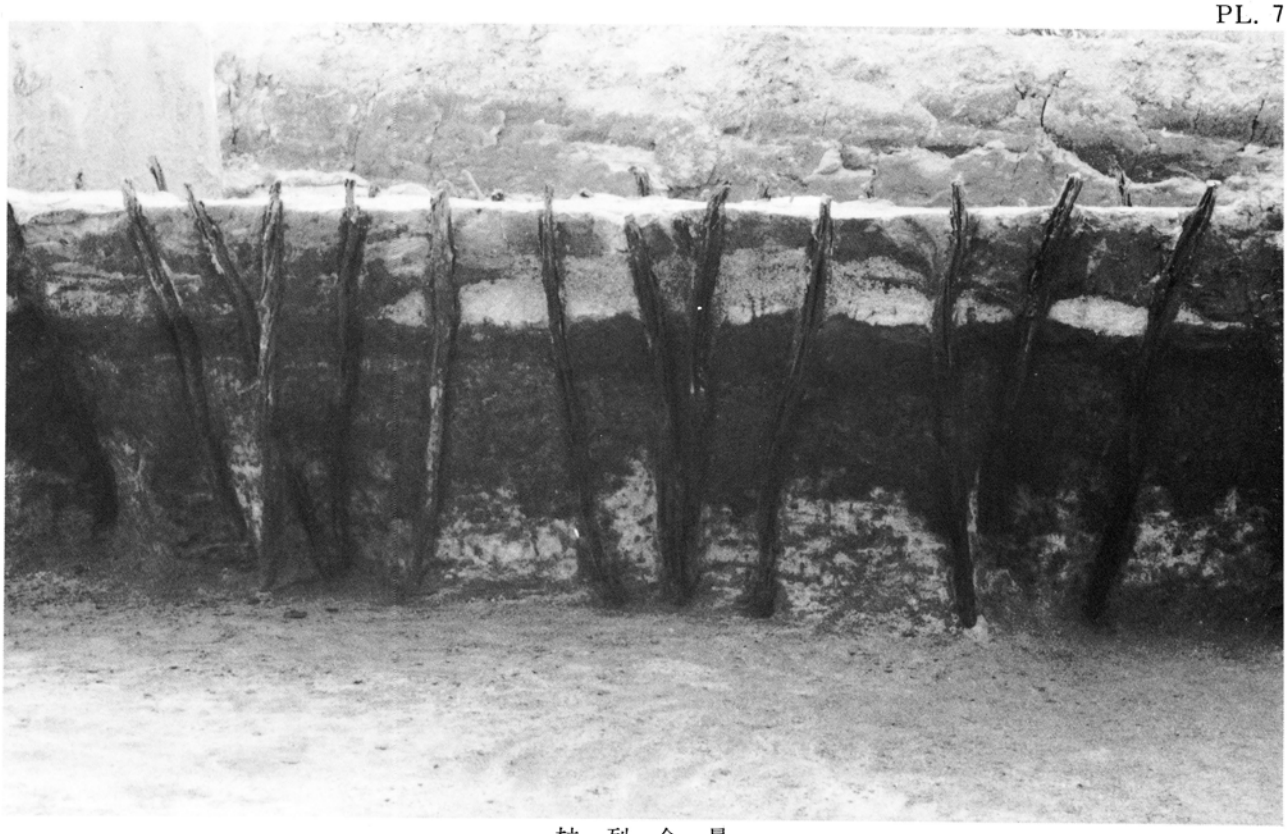
杭・B列全景　（北西より）

張出し遺構検出状態

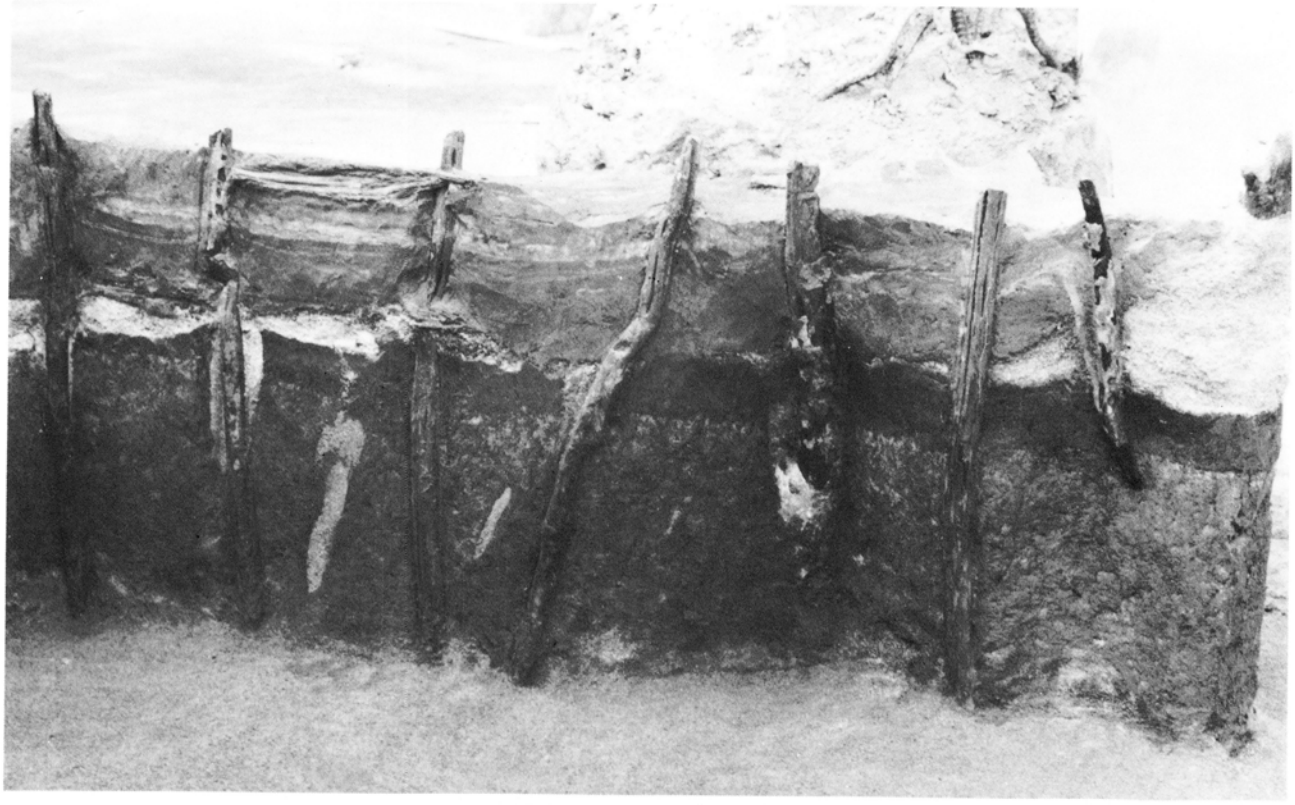
B列張出し部分検出状態

B 列杭の張出し部分

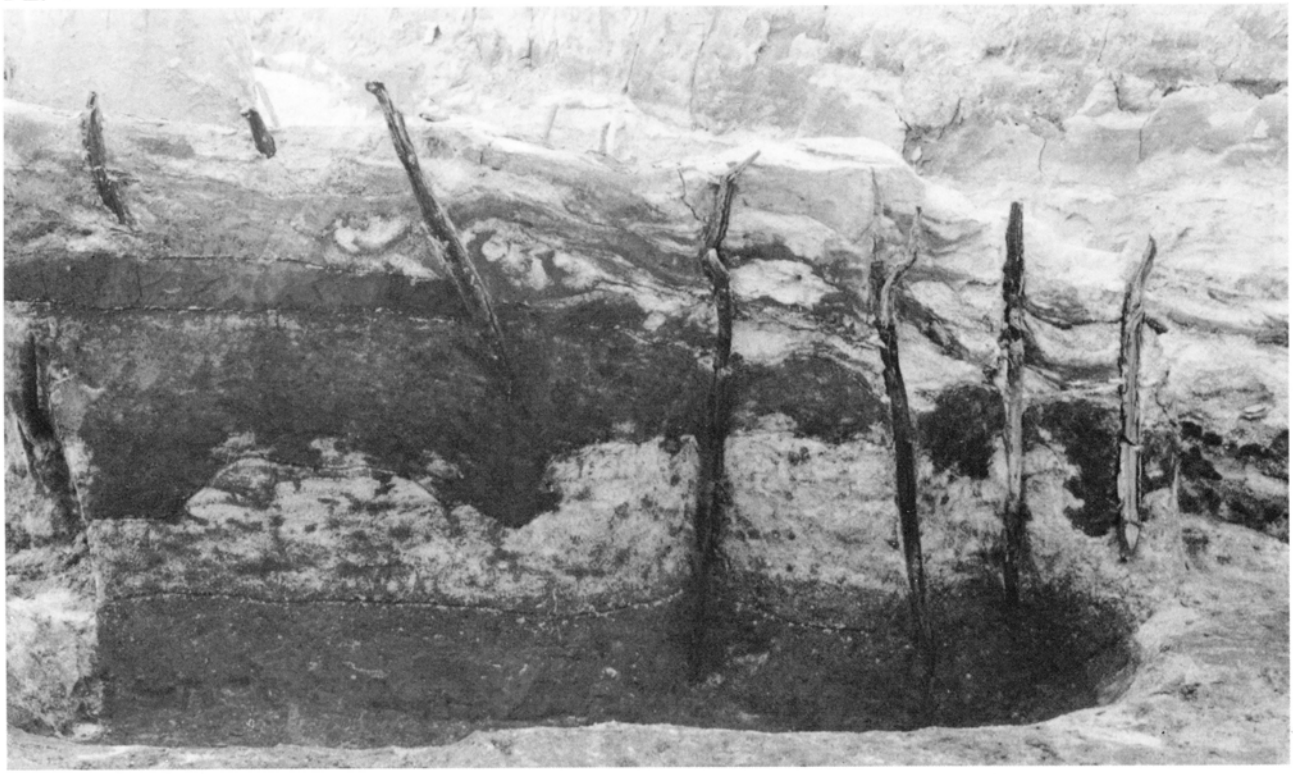
B 列杭検出状態と土層



杭 列 全 景



杭列とシガラミ検出状態



杭 列 全 景

杭列全景とシガラミ検出状態

杭とシガラミ検出状態

青磁出土状態

土 層 状 態　　(北から)

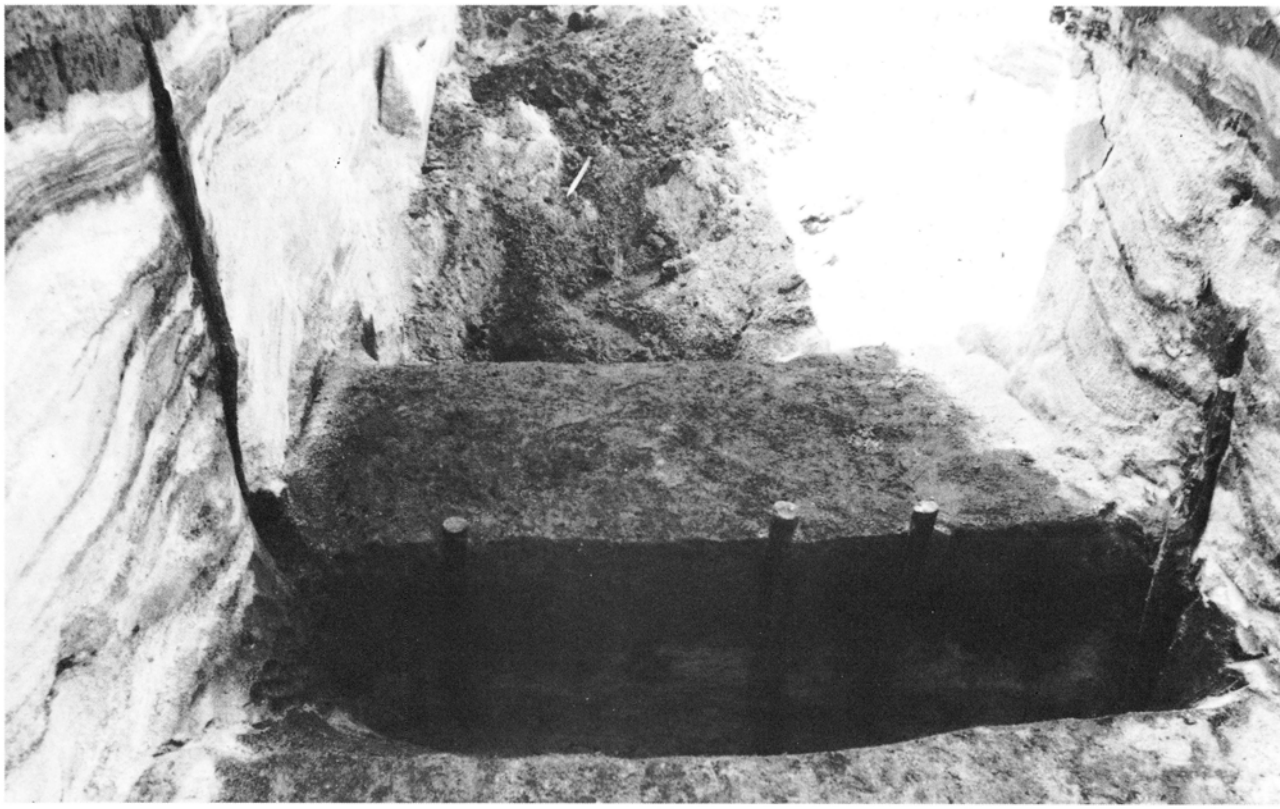
土 層 近 景

第２地点遠景　　（北から）

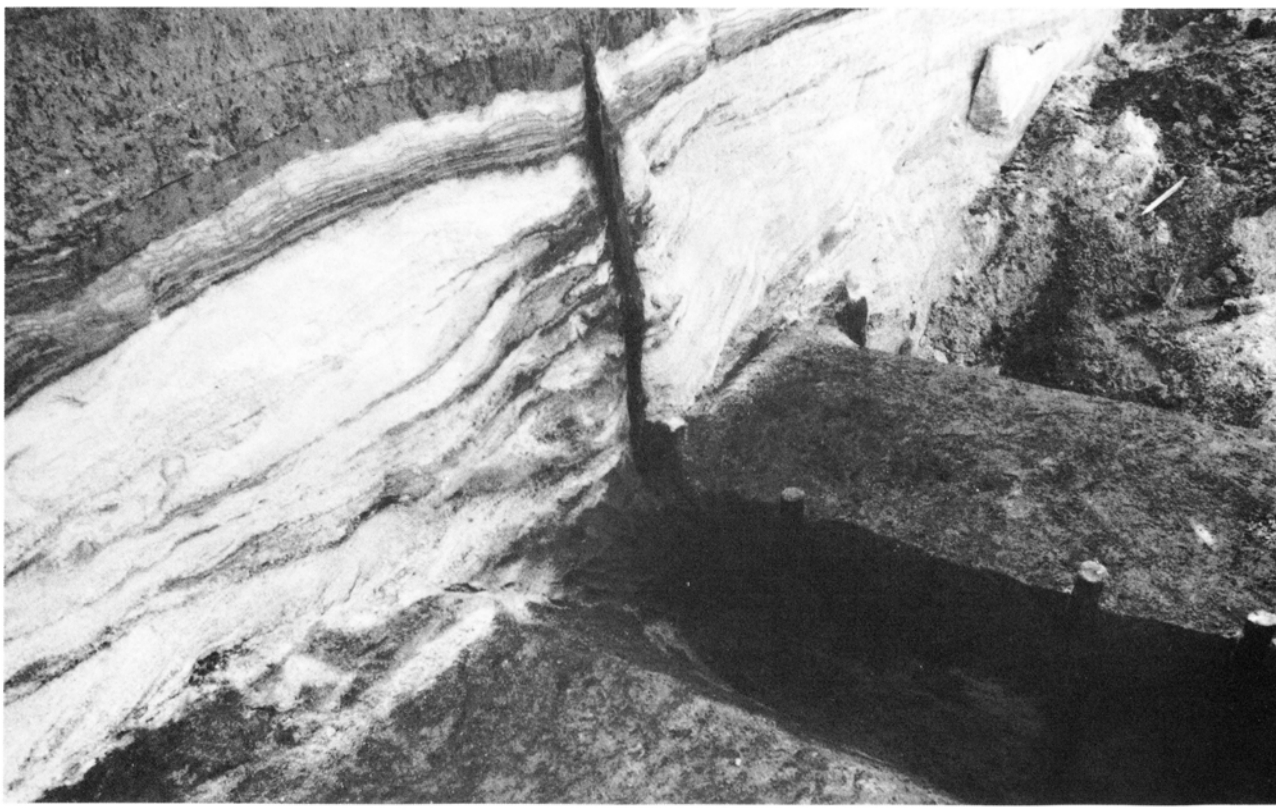
第２地点全景　　（東から）

第２地点近景

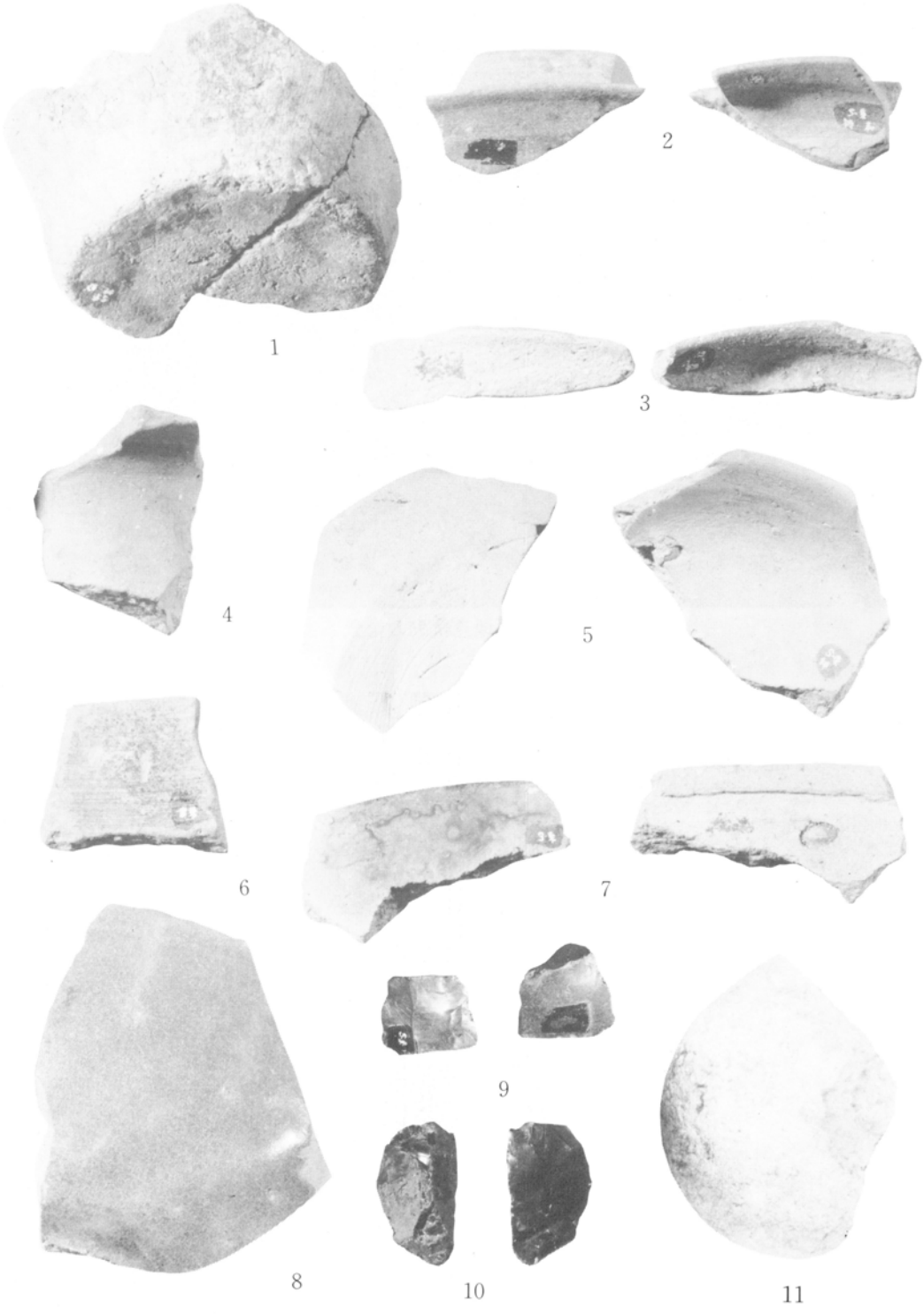
第２地点杭列出土状態



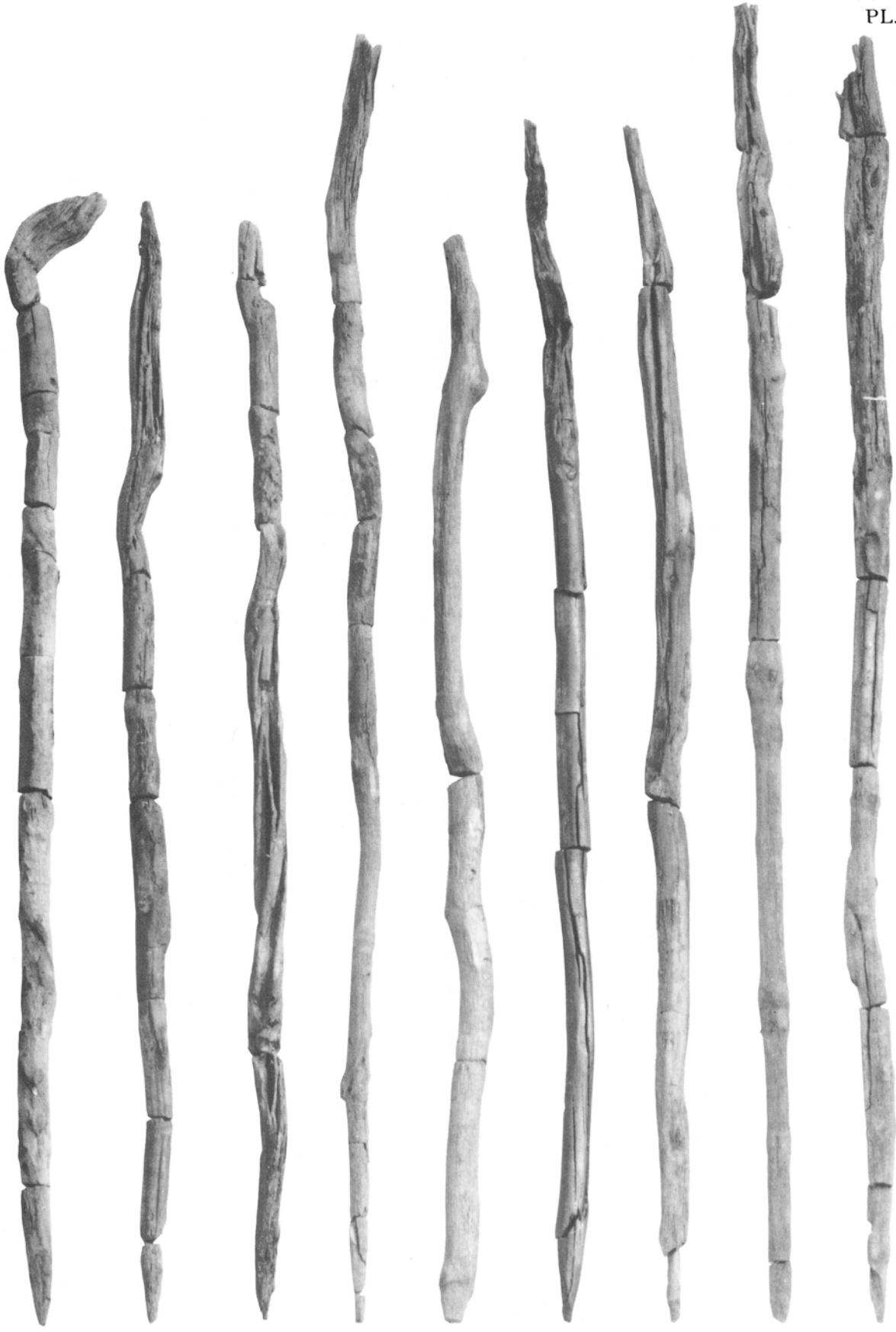
第２地点杭列の全景



第２地点杭列出土状態

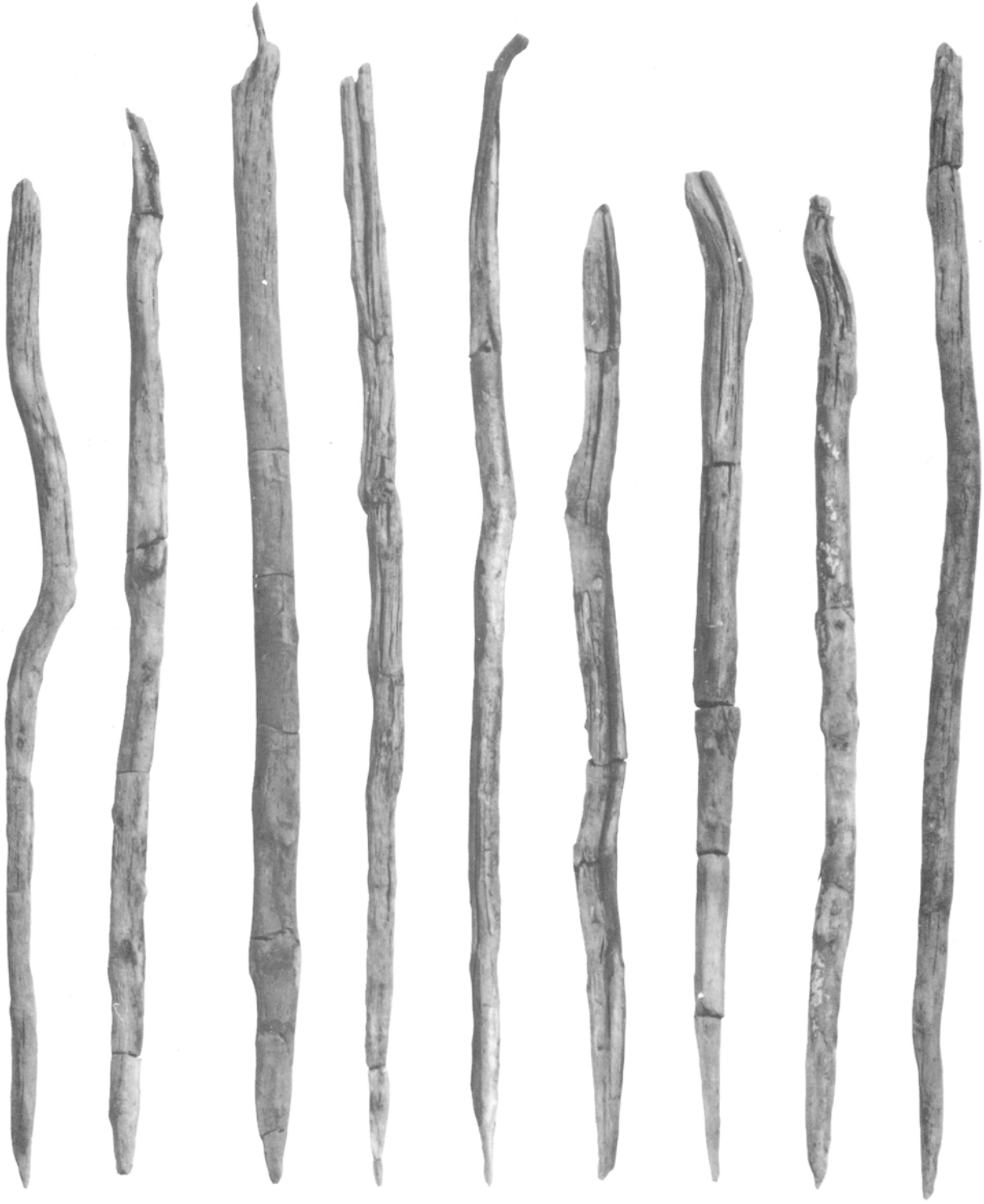


出土遺物・土器・石器



195 216 228 229 214 226 212 217

出土遺物・杭



194 207 230 139 190 210 259 221 233

出土遺物・杭

222　183　235　252　189　2-107　2-77　2-47　2-85

出土遺物・杭

福岡市博多区
駅東三丁目遺跡調査報告書
福岡市埋蔵文化財調査報告書第102集
1984年（昭和59年）3月31日
発行　福岡市教育委員会
印刷　㈱玉川印刷所

駅東三丁目遺跡調査報告書

福岡市埋蔵文化財調査報告書一〇二集

福岡市教育委員会